統括調整官菊地原亜希

葛城マサカズ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｒｅ：ＣＲＥＡＴＯＲＳで「特別事態対策会議」の統括調整官をしている菊地原亜希を主役にした被造物同士の戦いの裏側的な話です。

目　次

第１話内閣府への出向を命ず　1
第２話被造物の法的問題を検証せよ　5
第３話被造物の事案に防衛省は介入する　9
第４話被造物を逮捕せよ　13
第５話１０５号事案に防衛省が加わる　20
第６話被造物により荻窪署は襲撃を受ける　25
第７話「特別事態対策会議に改組する」　29
第８話接触した記者への対処　33
第９話被造物を協力者として獲得する案を検討する　36
第１０話「巨大駆動体出現ス」　41
第１１話統括調整官被造物への説得に向かう　53
第１２話統括調整官は総理官邸へ向かう　63
第１３話　被造物に対する特殊作戦を実行する　67
第１４話　統括調整官は事態を変える　71

第1話内閣府への出向を命ず

「菊地原君。内閣府へ行ってくれ」

警察庁で菊地原亜希は直属の上司から突然こう言われた。

亜希が居るのは警察庁警備局公安課である。そこで亜希は課長補佐をしている。

亜希の上司である公安課長はお遣いにでも行かせる様に亜希へ言った。彼女にとっては違う省庁である内閣府への異動はあまり驚くべき事ではない。

内閣府にある政府の安全保障部門である内閣情報調査室や内閣危機管理センターへ警察から出向するのはよくある事だからだ。

亜希もそのどれかに行くのだと思った。

「実は厄介な仕事になりそうなんだ」

上司がこう言うと亜希は警戒心を高める。

上司の普遍なる口調ではどんな厄介事なのか汲み取れない。

警察の中でも公安は外国のスパイや国内の過激派を追い監視する社会の裏側で活動する部門だ。普段から厄介な仕事ばかりをしている。

そんな所であえて言う厄介事はただごとではない。

「最近のX事案は知っているな?」

「はい。俗に言う超常現象的な事件と聞いています」

X事案と公安や警察関係者が口にする事件とは軍服の姫君など被造物と呼ばれる異世界の者達が起こした事件に付けられた名称だ。

被造物同士が戦うのでケンカや私闘の類としていたがさすがに頻繁に起きると無視できなくなった。

目撃証言や防犯カメラの動画から外国人による犯罪とも思えたが対象が空を飛ぶとかビームを放つような現実離れした行動をする為に説明のつかないX事案と呼ばれるようになった。

X事案の事件が東京都内で起きているので警視庁が捜査していると亜希は把握していた。

「そのX事案で自衛隊の武器が使われてしまったようだ。それで

代々木の競技場に被害が出てしまってな」
　これはメテオラが自衛隊から拝借した０１式軽対戦車誘導弾を使い軍服の姫君を攻撃した件だ。
　メテオラが発射したミサイルは一部が国立代々木競技場へ着弾して施設に被害が出ていた。
「自衛隊装備の盗難に国立とはいえ一般施設への被害拡大、Ｘ事案を政府が主導して解決する事になった。その対策部署の統括官を君に任せたい」
「課長補佐の私にですか？」
　亜希は統括官のポジションが自分では不相応ではないかと思った。
　政府の部署で統括官となれば自分以上にキャリアを積んだ局長以上の者が相応しいのではないかと。
「Ｘ事案はただキャリアを積んだだけでは難しくてな」
　上司は亜希へ一冊のファイルを渡した。
「Ｘ事案調査報告第２２号」と題したファイルを亜希は開く。
　そこには防犯カメラや目撃者によって撮影された画像とアニメや漫画のイラストらしい画像が並べて載っている。
　亜希は驚く。
　そのイラストのキャラクターとカメラで撮影されたＸ事案の容疑者の姿が凄く似ている。
「これは容疑者がいわゆるコスプレをして犯行をしていると？」
「かもしれない。だが連中の超人的な能力もそのアニメのキャラクターと同じだと分析が出ている。菊地原君はそう言ったのを知っていると聞いたのだが」
　上司がそう言うと亜希は全身が凍るような思いになる。
　亜希は趣味として読書している。その好む分野としてライトノベルと呼ばれる小説も読んでいた。
　時折自宅と庁舎の通勤途中で読む一冊として何冊か鞄に入れて職場に持って来ていた。
（アイツかなあ上司に言ったの）
　同じ読書愛好者である同僚にライトノベルも読んでいると告げた

事があった。
　その読んでいると言った作品はアニメ化もされた作品であった。そこから「アニメみたいな格好をした容疑者」の対策を任せられると思われたのかもしれない。
「詳しくはありませんが」
　亜希はそう答えた。
　小説は読んでいるがアニメや漫画・ゲームにまで趣味は広がっていない。仕事に追われて他のコンテンツに気が向く暇が無かったからだ。
「キャリアで適切な者だとアニメや漫画には疎いからな。少しでも知っている君なら常識外れでも混乱はしないと私は思っている」
　上司はどうやらX事案の対処を柔軟性のある点で亜希を選んでいるようだった。亜希にとっては正当な評価での抜擢なんだと納得できた。
「対策部署の長として内閣危機管理監の槙野さんが兼務する」
「2代前の警視総監ですね」
「そうだ。槙野さんをよく補佐してくれ」
「分かりました」
　こうして菊地原亜希は被造物同士の戦いに加わる事となる。

　菊地原亜希は内閣府に登庁した。
　X事案の対策部署は「特別事態調査室」と名前が定まっていた。
　内閣府の庁舎内にはこの「特別事態調査室」の為の部屋が確保されていて「統括調整官室」とされた部屋が亜希に与えられた。
「警察庁総務課から出向して来ました高江聡美です。宜しくお願いします」
　統括官となった亜希に部下が付いた。
　それが聡美である。亜希と同じく眼鏡をかけていたが童顔の彼女は初々しさを感じさせる。
「これから前例のない大変な仕事になるわ。宜しくね」
　亜希は同じ警察庁の人間同士と言う事で優しく応える。

「あの、菊地原さんも趣味が高じて選ばれたんですか？」
聡美が遠慮気味に尋ねる。
「違うわ。貴方はそうなの？」
亜希の答えに聡美は少しがっかりしたようだ。
「はい。私がアニメやゲームは大好きなのを知って課長が選んだそうです」
「私はライトノベルを少し読んでいるのが知られてよ」
亜希は聡美へそういうと聡美は希望の糸を掴んだかのように喜ぶ。
「どの作品を読んでいるんですか？」
「少し古い作品よ」と言うと作品名を答えた。
「あ～懐かしいですね。私も読んでましたよ。アニメも見ましたし」
まさに水を得た魚の如く亜希が読んだラノベについて語る。
ああこれがオタクなのかと亜希は未知を知った。

第2話被造物の法的問題を検証せよ

特別事態調査室が発足して警視庁と警察庁内だけで抱えていたX事案が第１０５号事案と呼ばれるようになった。
これは警察だけの問題から政府の問題になった事を意味する。
政府の問題となった事で被造物が起こす事件に警察が困っていた事が政府や省庁の間でだけ公になってしまった。
警察にとっては恥を晒すと言う意味にもなる。
でも良い事がある。
他の省庁からの人材を呼べる事だ。
「自衛隊の装備品が盗まれた上に使用されて建物に被害ですか。こんな重大事件が起きていたとは」
メテオラが０１式軽対戦車誘導弾を自衛隊駐屯地から盗み軍服の姫君に対して使い代々木体育館の一部を損傷させた事件のファイルを読むのは法務省の官僚だ。
法務省大臣官房司法法制部の橋田は事件の内容に驚いていた。
「こんな事件よく隠し通せましたね」
神経質そうな顔をしている橋田が皮肉ぽく言う。
「代々木体育館は国立の施設でしたから」
橋田の皮肉に亜希は眉一つ動かさず答えた。
「その隠された事件で私は何をすればいい？」
橋田は問う。
「１０５号事案に関わる容疑者を法的にどう裁く事ができるか知恵を頂きたいのです」
亜希は先輩へ教えを乞うような物腰になる。
どうも橋田の態度は特別事態調査室へ来た事を不満に思っているのが分かったからだ。
亜希は部署のまとめ役ではあるが上下関係で従わせるような事はできない。
この特別事態調査室は各省庁からの出向者が来る。
同じ役所なら上下関係で話はできるが他の役所から来た者を強引

に従わせるのは無理な話だ。だから不機嫌な相手には下手に出てお願いするしかない。
「分かりました。お教えしましょう」
亜希の態度に橋田は満足した。
「ではこの代々木での事件で自衛隊の装備を使った容疑者はどんな違法があったのですか？」
亜希は仕切り直して尋ねた。
「まず自衛隊の装備を盗んだ窃盗罪及び自衛隊施設へ侵入した住居侵入罪ですね。更に盗んだ自衛隊の武器を所持して使用した銃刀法違反ならびに代々木体育館を損傷させた器物破損または放火未遂に問われると思われます」
橋田はメテオラが代々木で犯した違法行為について並べ立てた。
「ミサイルでも銃刀法違反なんですね」
聡美が思わず口にした。
亜希は橋田が機嫌を悪くしないかとヒヤリとする。
「それはですね」
橋田は快く聡美の質問に答えた。意外と語りたい性格なのかもしれない。
「ミサイルでも銃刀法での「その他金属性弾丸を発射する機能を有する装薬銃砲」に当てはまるんです。また使用したので銃刀法での発射した罪にも問えます」
「これは勉強になります」
聡美はそう言って納得する。
橋田にしても満足そうだ。
聡美は亜希の方へ少し笑みを浮かべた。どうやら聡美が橋田の性格が分かった上で質問をしていたようだ。
「しかし、空を飛ぶとかこの容疑者は宇宙人とか言いませんよね？」
橋田はメテオラなどの容疑者の正体について触れる。
「容疑者の特定に繋がりそうな情報はあります。これなんですが」
亜希は「Ｘ事案調査報告第２２号」のファイルを橋田に見せる。
橋田はファイルを開くとすぐに顔をしかめた。

「菊地原さん。これは冗談ですか？」
橋田は笑いながら言う。
「いいえ。真面目な検証です。私も信じられませんが」
「そうですよね」
橋田は亜希の信じられませんと言う言葉にだけ応えた。
「仮にこの容疑者が漫画のキャラクターだとしたら氏名不詳で起訴になりますね」
「え？名前があるのに？」
聡美がまた疑問を投げかける。
「名前があっても証明する必要がある。この自衛隊装備を盗んだこの容疑者がメテオラ・エスターライヒと言う名前を名乗ったとしても実在を証明できないんですよ」
橋田は聡美の疑問に答える。
「つまり戸籍が見つからないと言う事ですか？」
聡美の答えに橋田は頷く。
「そうです。同姓同名は居るでしょう。でもこのエスターライヒさんが戸籍と住所や学校または職場に所属しているなど個人として証明されないといけない」
名前があっても何処に住んでて何をしている人か特定の個人として証明できないと法的には正体不明なのだ。
「このエスターライヒと言うキャラクターがゲームに存在すると分かっても私達の世界に居るかどうかが問題ですね？」
論点整理として亜希は言う。
「そうです。まあゲームや漫画の登場人物が抜け出ているなんて私は思えないですが・・・」
橋田は現実主義がブレない。
「橋田さん。もしもこの容疑者達の中から捜査の協力者を獲得する場合は法的に難しくなりますか？」
亜希が尋ねる。
「そうですね。捜査に使うだけなら個人の特定はあまり必要ないでしょう。しかし協力者が日本国内の定住などの便宜を求めた場合は

法的な保障を与えないといけないですね」
「身分保障になるとしたらどんな法を適用するようになりますか？」
「まずは協力者に在留資格を法務大臣が与える事ですかね」
橋田が言う在留資格とは外交や教育に経営などの仕事や芸術活動などの文化活動をする外国人が日本国内で一時的に住めるようにできる資格の事だ。
認定は入国管理局を監督する法務大臣による。
あくまで何かの活動の為であり定住者のような移民や移住の資格とは違う。
「漫画やゲームのキャラクターに在留資格を与えるとしても元の国籍が架空の御伽の国じゃ法務省は困るだろうと思うのだがね」
橋田は笑う。どうもまだ被造物の事を信じてないらしい。
「大臣を困らせるような事はあまりしたくはありませんね」
亜希は橋田に合わせてそう答える。
「でも多くの人に迷惑をかける事になるでしょうね」
正体がまだ分からない被造物が起こす事件
警察だけではもはや解決できないとしてこの特別事態調査室がある。
既に色んなモノを巻き込んでいる。
その一つが橋田自身なのだ。

第3話被造物の事案に防衛省は介入する

特別事態調査室は橋田ら法務省の出向組を迎えた事で法的な問題の検証が進む。

ようやく調査室としての活動が本格化した。

そんな最中に亜希は総理官邸で開かれた「犯罪対策閣僚会議」の末席に加わっていた。

犯罪対策閣僚会議は文字通り犯罪の対策について内閣の閣僚が話す会議だ。

テロから銃器・薬物の犯罪に振り込め詐欺に関する情報と対策に治安に関わる課題が議題になる。

この日もテロ対策から会議の議題は始まった。

亜希が内心手持無沙汰で数々の案件の討議を聞き会議の最後にようやく出番が訪れた。

亜希は調査室の室長を兼務する内閣危機管理監である槙野友則に代わり説明する。

「特別事態調査室の統括官である菊地原です。現在調査中の異常事態について報告を申し上げます。まずは配布資料をご覧ください」

立ちながら亜希は軍服の姫君やセレジアなど被造物が起こす事件について説明を始める。

「冗談にしか見えん。現実に起きているのか?」

会議の主宰者である総理大臣が困惑しながら亜希へ尋ねる。

この反応は亜希にとってはもう慣れたいつもの事だ。

「はい」

毅然と亜希は答える。

だが総理も閣僚達も納得できていない。

亜希が事件を起こす被造物の動画も流して説明し、配布資料に様々な根拠を示しても納得ができない。

漫画やゲームのキャラクターがこの世に現れたと言うのを政府中枢がすぐに「なるほど」と呑み込めるものではない。

「菊地原統括官、どう解決をするつもりだ?」

停滞気味になりそうな場の空気を変えるように法務大臣が尋ねる。
「容疑者を逮捕し事態の収拾を図ります」
亜希の答えに閣僚達は固い表情のままだ。
できる訳が無いと言う反応を示している。
「このまま放置はできません。施設の被害だけでは無く死傷者が出る前に容疑者を止めなければ」
亜希は言葉を重ねるが閣僚達の信用は得られない。
「実行すべきです。菊地原統括官の言う通り放置はできない」
槙野が自分の部署の意見を亜希に代わり強調する。
「しかし、出来るのかね？」
総理は尚も疑問があるようだ。
「放置すれば我が国の治安維持に問題ありとなってしまいます。逮捕に動くべきです」
警察や公安をまとめる国家公安員長が発言する。
国家の治安を担当する彼からすれば被造物の動向は亜希と同じく放置できないのだ。
「総理、まずは警察で対処しましょう」
槙野は総理へ進言する。
統括官と言う役人に過ぎない亜希は言葉を重ねず総理の返答を待つ。
「分かった。この件は警察に任せよう」
決断は下った。
「でもどうやって逮捕するんですか？被疑者は空を飛ぶんですよ」
会議が終わって後で逮捕の方針に聡美が疑問を亜希へ投げかける。
「空を飛ぶ相手を見つけるアテはあるじゃない」
亜希がこう言うと聡美は何かを思い出した。
「能力は確かにありますけどアテにしていいでしょうか？」
そのアテにしていいのかと聡美が心配する人物と亜希は二日前に遭っていた。
「防衛省統合幕僚監部の荒井と言います。第１０５号事案で自衛隊の装備品が盗難された件について伺いました」

荒井と名乗る男は亜希に目的を述べた。
だが亜希はメテオラによる自衛隊装備盗難の件だけでは無い気がした。
それは荒川の様子を見ての直感だ。
眼鏡をかけ神経質そうな顔をした荒井
だがうつむき加減の顔は亜希を見つめているのが分かる。
(私の態度を見て決める気?)
亜希は荒井のような性格の人間が好きでは無かった。
まず相手の値踏みをしてから話を始めるようなタイプが。
「装備品盗難事件に関しては防衛省に通達して東部方面警務隊と防衛装備庁とで処理がなされたと聞いています」
亜希は終わった事だと述べる。
「その通り。盗難された装備品は無いと言う事でね。盗られた装備品はまだ納入されていないとされている」
荒井は何かを嘲笑するように言う。
防衛省は01式軽対戦車誘導弾などの装備品の犯人が被造物であるメテオラだと分かると逮捕や事件の追及が不可能と判断した。
それは事件そのものを「無かった」事にした。
メテオラが盗んだ対戦車ミサイルと機関銃はまだ配備されていない、メーカーから納入されていない駐屯地に存在していないモノとされた。
「これ以上何を知りたいんです?」
亜希は荒井の目的が分からない。
「貴方は察しが良さそうだ。本当の目的を教えよう」
荒井の態度に亜希は苛立つ。
「第105号事案は警察の力だけでは対応できなくなると防衛省は予測している。防衛省として事態解決に協力を申し出ると告げに来たのです」
「これは非公式ですか?」
「その通り。ただし防衛大臣と槙野監理官に総理は存じている」
亜希は警察庁の公安と言う職場でグレーゾーンな事態を目にして

来た。
非公式な動きは珍しくない。
ただ亜希は目的を焦らすように見せない荒井に不快感があった。
「防衛省は何故１０５号事案に介入しようとするのです?」
「難しい話じゃない。漫画やアニメのキャラクターが出て来るのなら巨大な生物や巨大なロボットが出現する可能性がある。そうなれば国家の危機だ。自衛隊が出なければならない。だから早い内から事態に関わる事にしたんだよ」
亜希はようやく納得した。
現在出現している被造物は人間と変わらない姿と大きさだ。
しかし、いつ巨大な被造物が出現してもおかしくない。
歩くだけで街を破壊しかねない架空のキャラクターは山ほどある。
そうなると自衛隊の戦車や戦闘機による打撃力が必要となるだろう。
「分かりました。ご協力の申し出に感謝します」
荒井の目的が分かり亜希は納得して表情を緩ませる。
しかし亜希は警戒心を解かない。自分から協力しに来る役所は何かあると考えていた。

第４話被造物を逮捕せよ

会議から三日後の東京都内
夜の東京で赤色灯を光らせる警察車両が列を成して進む。
パトカーに機動隊が乗る輸送車や特型警備車が縦列でビルの谷間をけたたましいサイレンを響かせて駆け抜ける。
誰もがこの光景に何が起きたのかと驚き好奇心からスマホのカメラを向けて撮影する。
「注目を浴びていますよ統括官」
警視庁第４機動隊を率いる林田警視は外を眺めながら亜希へ言う。
機動隊を率いる林田が乗るランドクルーザーに亜希は同乗していた。
「でも肝心の被疑者は見ているんですかね？」
林田は振り返り亜希へ尋ねる。
「見ていますよ。ずっと追って来てますから」
亜希は自分が持つノートＰＣを見ながら言った。
そこには自衛隊のレーダーで探知している被造物の位置がリアルタイムで表示されている。これは荒井の手配によって亜希が自衛隊の情報を入手できるようになったのだ。
「では確保の段階に移って良いですか？」
「はい。お願いします」
亜希は飛行する被造物が出現したのを知ると機動隊の出動を警視庁に要請
被造物を追うように機動隊の車列を移動させた。被造物が追跡されていると分かり車列の上空に来ると今度は被造物から離れるように先行する。
レーダー探知で見る限りでは被造物が追いかけていると亜希は確信して被造物の身柄確保の段階に移る。
（これで事態は前進できる）
これまで被造物の情報は集めていたが接触はできていない。
一人でも身柄が確保できれば被造物の正体が分かるかもしれない。

亜希は機動隊を出動させたこの作戦に大きな期待があった。
「所轄と先遣小隊が新宿御苑より民間人を退去させ展開要地の確保ができました」
「よし。新宿御苑へ入るぞ」
無線で状況を聞いた林田は部隊を新宿御苑へ進出させる。
静かな新宿御苑は赤色灯で赤く照らされサイレンが重なり騒々しくなる。
「小隊ごとに展開！銃対（銃器対策部隊）はこっちだ！」
林田は指揮車から降りて指示を飛ばす。
機動隊員達は片手にアクリルの防盾を持ちながら小隊ごとの隊列で庭園内を駆ける。
「統括官、中で待っていて下さい」
指揮車から降りて来た亜希へ林田が慌てた。自分の監督下で官僚が死傷するような事態は避けたいからだ。
「邪魔はしません。直に現場を見たいのです」
亜希は林田に頼み込むが口調は反論をさせない険しさがあった。
「分かりました。ですが危険だと判断したらすぐに指揮車へ戻って下さい」
林田は呆れながら亜希へ注意をして現場に立つのを許した。
「降りて来たぞ！」
「構え！」
隊員達が騒ぎ出す。
夜空へ誰もが視線を向けるとそこには一人の人の形を何かが浮いている。
どうやらスカートらしい服を身に付けているようだ。
（あれが被造物…）
ゆっくりと降りる被造物の姿
庭園の照明や周囲のビルの明かりにパトカーの赤色灯が被造物の姿を照らす。
長い髪で黒衣を纏っているのが見えた。
（あれは不特定対象）

亜希はどの被造物なのか記憶を辿る。
どのキャラクターと似ているか特定されていないのを「不特定対象」と呼称していた。
「余を追いかけていたのはお前達か？」
被造物は浮いたままで見下ろしながら問う。
「そうだ。器物破損の容疑がある。同行願おう」
林田が覇気のある声で被造物へ告げる。
「それは私を罪人として捕らえると言うのか？」
「容疑が固まればな。その為に署まで同行して話をしようじゃないか」
林田は任意同行について基本的な事を述べた。
「断ると言うなら？」
被造物は試すように尋ねる。
亜希には被造物が笑っているように見えた。
「実力で身柄を確保させて貰う」
林田がそう答えると被造物ははっきりと口元をニヤリとさせた。
「ではやってみるが良い。余を捕まえてみせよ」
被造物は地上に降り立った。
機動隊員は盾を持ち身構える。
「どうした？余を捕まえたいのだろう？」
被造物は機動隊員へ呼びかける。
「任意同行だ。そちらがこちらへ来て貰おう」
林田は被造物へ行動を求める。逮捕では無い任意同行なのだから捕まえる事は出来ない。
「余はそなた等に進んで身を預けるつもりは無いのだがなあ」
被造物は韜晦するように林田へ言う。
林田はたまらず亜希へ視線を送る。
「公務執行妨害で確保しますよ。いいですね？」
「はい」
亜希は即答した。
「任意同行拒否による公務執行妨害で逮捕する！確保！」

林田の号令で機動隊員が一斉に動き出す。
「やっとやる気になったか」
被造物は自分の周囲に大量のサーベルを円状に出現させた。
「あれは！」
亜希は被造物が映し出された動画で同じ場面を見ていた。あの大量のサーベルはあの被造物の武器だ。
「怯むな！突っ込め！」
機動隊の小隊長達はサーベルが突如出現しても突入を続けさせた。
この勢いを止めたら逆にサーベルを使われてしまう。間合いを詰めれば良いと判断したのだ。
「蛮勇は嫌いではないぞ」
機動隊の突入を眺めながら被造物は広げているサーベルを一斉に放った。
サーベルは突入で駆ける機動隊を薙ぎ倒す。
パトカーの赤色灯が庭園を照らしているせいか機動隊員が血を流して倒されたように亜希に見え亜希は目を丸くして絶句した。
「やってくれたな…」
林田は部下が刃に倒されたのを見て怒りを露わにする。
「心配は無用だ。彼らをサーベルで叩いただけさ」
被造物が言う通りだった。倒された機動隊員は痛みに呻きながら立ち上がろうと動いていた。
負傷しているが殺されてはいない。亜希は安堵した。
「鬼の４機を馬鹿にしおって…」
学生運動によるデモ隊や過激派との闘争で恐れられた伝統を馬鹿にされたように林田は思えた。
「銃対！あの犯人へ構え！」
林田は被造物を警官に暴行を加えた犯人と認識して銃器対策部隊を前へ出す。
隊員はＭＰ―５短機関銃を被造物へ構える。
「犯人に告ぐ！抵抗を続けるなら発砲する！」
怒りがあっても林田は警官としてのやり方は崩さない。

「撃ちたまえ。当てられるなら」
被造物は両手を広げ挑発する。
だが林田は短機関銃での威嚇発砲をする。
夜空へ向けて撃つＭＰ―５に被造物はため息を吐く。
「そなた等は余を馬鹿にしておるのか？何がしたいのだ？」
警察官職務執行法を守る林田の行動に被造物は呆れた。
一方で林田は法の縛りが無ければ即座に被造物の身体へ銃弾を叩き込みたかった。
犯人逮捕を目的とする警察官執行法では威嚇射撃をしても犯人が警察官に従わない、または抵抗をすれば当てる射撃ができる。
「抵抗をやめろ！今度は当てるぞ！」
林田は真面目に怒鳴る。
「さっさとやりたまえ。やる気が無いなら余は帰るぞ」
被造物は右手をフラフラと振り気が抜けたようなそぶりを見せる。
「林田警視、危害射撃をするべきです」
「分かっている。銃対！犯人へ向かい危害射撃！撃て！」
亜希の進言も受けて林田は被造物の身体へ当てる射撃を命じた。
ＭＰ―５の９ミリ弾は被造物へ向かうが被造物は飛び上がって回避する。
「あそこだぞ！撃て！」
林田は方向を指示して射撃させる。
しかし銃撃を被造物はヒラリと身軽にかわす。
「くそ！」
林田は銃器対策部隊の銃撃を嘲笑うように避ける被造物に悪態をつく。
「航空隊！容疑者の頭を押さえろ！」
林田は現場を空から監視している警視庁航空隊のヘリに被造物の動きを押さえさせようとした。
「ふむ。空を飛ぶ乗り物か」
被造物は新しいモノの出現に興味を持つ。
「被疑者の頭を押さえて飛行の妨害をしろ！」

林田はそう命じるが当のヘリのパイロットは難しさを感じた。
被造物はヘリの周りを縦横無尽に飛び回る。むしろヘリの方が翻弄されていた。
「ダメだ！容疑者の方が早い、こっちが振り回されている！」
「航空隊は容疑者の追跡を中止、一時離脱せよ」
パイロットの悲鳴に近い連絡に林田はヘリによる抑え込みを中止させた。
「くっ…」
亜希は警察で捕まえるのに限界が来たと感じた。
屈強な機動隊員は一瞬で叩き伏され、銃撃も容易くかわされ、ヘリを翻弄してしまう。これ以上の手段は警察に無い。
「待機中のＳＡＴと銃対で連携して容疑者を狙撃せよ」
でも林田は諦めていない。ヘリに乗り空中で待機している特殊部隊ＳＡＴと地上の銃器対策部隊とで被造物を挟み撃ちにする作戦に
そんな時に亜希の携帯が着信したと震える。
電話をかけて来たのは荒井だった。
「被造物を逮捕できましたか？」
亜希は荒井の言葉が嫌味に聞こえた。
「いえ」
「手に負えないようでしたら防衛省としても手を貸せますよ」
「どのような事ができます？」
「百里基地からＦ―１５が２機、訓練名目で千葉県沖の太平洋を飛行している。これをすぐに東京へ行かせられる」
「人口密集地の上空で空中戦をする気ですか？」
さすがに亜希は驚いた。
「そちらも庭園の中とはいえ都市のど真ん中で発砲しているではないですか」
荒井の反論に亜希と林田の行動を荒井は監視していると分かった。
「周囲の一般人を避難させて交通を規制した上での発砲です。戦闘機を出しての空中戦とは違います」
「確かに戦闘機が作戦行動を行えば範囲は狭く出来ない。だが国家

の安全を考えれば大きなリスクは背負うべきだ」
「そうした解釈には今は同意しかねます」
亜希と荒井が電話で話している間にＳＡＴを乗せたヘリは被造物へ狙撃する位置に到達した。
ＳＡＴの隊員は機上からＭ１５００狙撃銃で被造物への狙撃を試みる。
だが被造物は降下して簡単にかわす。
降下した被造物を地上の銃器対策部隊と空中のＳＡＴがＭＰ―５で射撃するがサーベルを出現させて回転させながら銃弾を弾き返す。
「化け物め！」
林田は呻いた。
そんな林田の姿を見て被造物は高らかに笑う。
「もう降参か？余には傷一つ無いぞ」
林田をはじめ機動隊員皆が屈辱に震える。
「弱い！お前達は弱すぎる！創造主の世界の兵達がここまで弱いとは思わなかった。余は呆れたぞ」
亜希は目が険しくなり唇をかみしめて屈辱の感情に耐える。
「お前達に付き合うのに疲れた。帰らせて頂くよ」
被造物はそう告げると姿を消した。
「消えた…」
林田や機動隊員達は突然消えた事に呆然とするように驚いた。
「逃がしたかね？」
電話の向こうから荒井が尋ねる。
亜希は無言で電話を切った。
これが後に軍服の姫君と呼ばれる被造物と亜希が初めて対峙した時であった。

第５話１０５号事案に防衛省が加わる

亜希は久しぶりに都内にあるマンションの自宅に帰った。
玄関で靴を脱ぎフラフラと廊下を歩く。
リビングに着くやソファーに身体をぶつけるように座る。
「はあ疲れた・・・」
ソファの柔らかさに背中を預けながら亜希はぼやく。
新宿で後に軍服の姫君と呼ばれる被造物に翻弄され逃した件で亜希は政府への報告で心身が疲れた。
亜希も機動隊と航空隊を警視庁から借りて防衛省と情報連携して自信を持って軍服の姫君に挑んだだけに作戦の失敗と政府内からの失望の声に対応するので疲れたのだ。
「警察で対応できてないじゃないか」
「都内であんなに発砲して何も成果が無いとは」
「抜本的な対策だ。人事面も見直すべきかもしれん」
亜希は政府への報告に立つ時はまるで査問会にかけられている気分だった。
「あの連中言いたい放題言って！被造物を過小評価していた私も悪いだろうけど」
亜希は冷蔵庫から缶ビールを取り出すと一気に一本を飲み干し愚痴を吐き出す。
心身にアルコールが回り亜希はストレスで強張る身体が緩まる。
ジャケットを脱ぎシャツのボタンを外してよりくつろぐ亜希は酔いでぼんやりする。
ぼんやりした頭でまた政府で報告をした時を思い出す。
政府からの重い叱責を浴びていたのは亜希だけではなかった。
亜希の上司である槙野もだ。
閣僚の中には槙野の監督に問題があるのでは？と遠回しに言う者も居た。
槙野は浴びせられる言葉に黙って聞き「今回の失敗は作戦を認可した私に責任があります」と答えた。

（あんなに良い上司だと思わなかった）
亜希は槙野の性格は正直分からなかった。
いつも寡黙で余計な事は言わない性格だからだ。
警察官の時代では警視庁警備部外事課長（外国のスパイやテロリスの捜査）や県警本部長・警察庁警備局長を経て警視総監になった人物だ。
警備公安畑を主に歩んだ槙野
同じく警察庁の公安でもあった亜希にとっては親近感のある経歴だがお互いが同族として好意的な仲になる訳でも無かった。
あくまで仕事上の上下関係でのドライなもので仕事以外で話す事も無かった。
それは槙野に限った事ではないが相手の一面しか見えない関係と言えた。
だから亜希にとっては自分を擁護してくれる面は意外にも思えた。
亜希と槙野への責めを一通り終わると報告会も終わった。そこで何かの処分が下される事も無かった。
槙野は一言だけ亜希へ伝える。
「気にするな。俺達以外やる者はいないんだ」
それだけ言うと槙野は再び寡黙ないつもの姿に戻る。
「他にやる人がいない・・・・それがいい事なのかしら？」
今度はレモンチューハイの缶を開けてゆっくり飲みながら亜希は自分の置かれた立場を考える。
被造物の逮捕に失敗した。
だが被造物の事件への対処を亜希や槙野に代わりやりたい人は居ない。
自分に押し付けられたままの責任・・・
（やめよう。余計に気分が落ち込むわ）
亜希は重くなる気分を変えようと缶に残るチューハイを一気に飲み干す。
新宿での軍服の姫君との戦いから一週間が過ぎた。
政府からは特に処分が下る事は無かった。

やはり代わって被造物の事件に取り組む者は居ないようだ。
誰も処分はされなかったが人員が追加された。
「本日から防衛省からの出向で来ました。宜しくお願いします」
荒井が特別事態調査室の所属となったのだ。
「この事件は国防の案件になったか」
橋田は防衛省の参加にややっこしい事態になるんじゃないかと思えた。
橋田は警察による軍服の姫君逮捕の出動に際しての法的な根拠や正統性についての検証を行っていた。
今度は自衛隊が被造物に対して出動し武力行使をするかもしれない。実戦部隊が出動するだけでも根拠と正統性をどうするか頭が痛いなと法務の担当者として橋田は思ったのだ。
「防衛省の参加により１０５号事案はより被造物へ直接対処する段階へシフトしました。それでも今までの調査分析を行う事は変わりません。しかしより解決へ向けて前進する事になります」
亜希は既に調査室へ出向している省庁の官僚達へ向けて言った。
特段の変わった反応は見られない。
漫画やゲームのキャラクターが現実世界で暴れている事件に関わっているせいか防衛省が加わったぐらいでは驚かないのかもしれない。
「正直貴方が来るとは思わなかったです」
亜希と荒井は調査室の面々への挨拶が終わると別室に移る。二人以外にも聡美と荒井の部下が同席している。
「いつの間にか関係者になっていてね。ならばここへ行けと言われたのさ」
荒井の口調からは調査室への出向をどう思っているか亜希には読み取れなかった。
「ところで話があるとは？」
別室に移り話があると言い出したのは荒井だった。
「１０５号事案についてアメリカも興味を持っている」
「アメリカが？」

「新しいテロリストとして興味があるようだ」
「それよりもアメリカが１０５号事案をどうやって知ったんですか？」
国民を混乱させるとして１０５号事案は機密事項になっている。それが何故アメリカが知っているのか？と言う疑問が亜希と聡美に浮かんだ。
「被造物と言ったか。アレが飛び回るのは在日米軍のレーダーでも探知している。それを米軍が独自に調査していた」
日本国内には日米安保条約により米軍が基地を置き駐留している。横田基地のレーダーにアンノウン（国籍不明機）が度々映り調査を始めた事から米軍も被造物について調べて知っていたのだ。
「防衛省や自衛隊が情報をリークしたのでは？」
自衛隊と米軍の情報共有は密なもので１０５号事案について防衛省か自衛隊によって情報提供されたのでは？と亜希は指摘したのだ。
「共通の脅威だからな。米軍がある程度自分で調べてからこちらに尋ねて来たよ。丁度１０５号事案が制定された頃にね」
「そうですか」
機密事項を米軍へ教えた事に亜希は怒る事は無かった。
警察庁では公安に居た事で機密情報が横から流れるような出来事は経験があるからだ。
「それでアメリカは何か要求がありましたか？」
「要求では無く協力する事は無いか尋ねて来たよ。必要ならステルス戦闘機でも特殊部隊でも用意できるとね」
亜希は「そうですか」と短く応える。
「しかし安保条約があっても他国の手を借りるのは気が進みませんね」
「だが警察だけで無理なのは確かだ」
新宿の事を言う荒井に亜希は少し苛立つ。
「では荒井さん。防衛省はアメリカの介入が必要だと考えているんですか？」
「いや私だって早々に米軍に助けは求めたくはない。だがまともに

勝てる相手じゃない。選択肢はあると私は言いたかったのです」
荒井は亜希が機嫌を損ねていると察した。
「まともに勝てる相手でないのは新宿で十分に分かりました。ですが米軍の協力を要請するのは最後の手段です。まだ万策尽きた訳ではありませんから」
「何か策があるんですか？」
荒井は関心があると顔に書いて亜希へ訊く。
「策と言える段階ではありませんが何か進展する糸口にはなりそうなんです。事態がはっきりしてからお伝えします」
「菊地原さん。荒井さんへ言った糸口は警視庁が見つけたキャラクターですか？」
荒井との話を終えると聡美は亜希へ尋ねた。
「そうよアレが私達に協力してくれれば解決への糸口になるわ」
二人が言う糸口やアレと言う対象を見つけたのはＳＮＳだった。
あるキャラクターに凄く似ている人が居ると画像付きで伝え広まっていた。
調査室はそうしたＳＮＳの動向を警察庁情報通信局から伝えられた。
亜希はＳＮＳで拡散されているその情報を見て見憶えがあった。
代々木の国立競技場で軍服の姫君と剣で戦った赤い髪のキャラクターに似ていた。
ＳＮＳの情報からそのキャラクターは都内に居るらしいと判明する。亜希は警視庁へ捜索を依頼しすぐに見つけた。
そのキャラクターの名はセレジア・ユピティリア
アニメ「精霊機想曲フォーゲルシュバリエ」のヒロインだ。

第６話被造物により荻窪署は襲撃を受ける

「このセレジア・ユピティリアを我々の協力者にしようと思います」
亜希は橋田や警察庁からの出向者を呼んで会議を開いていた。
「目には目を。歯には歯をですか」
警察庁の出向者である警備局警備企画課の所沢警視正が得心したように言う。
「そうです。被造物を相手に我々では力不足です。被造物に対するには被造物で立ち向かうのが良いと思います」
「同感ですね。漫画の世界から出て来た被造物だとＳＡＴやＳＩＴを全部集めても相手にならないでしょう」
警察の特殊部隊であるＳＡＴやＳＩＴでも被造物相手に勝てないと所沢は言う。実際に新宿では機動隊と同行したＳＡＴが軍服の姫君には敵わなかった。
所沢は新宿の件も知っていて（むしろ関係した当事者）亜希へ言っている。
「そういえば統括官は以前に被造物を協力者にできないか言ってましたね」
橋田が亜希に尋ねる。
「はい。橋田さんは協力者が便宜を求めた場合は在留資格が必要になるかもしれないとおっしゃいましたね」
「そうです。本当に漫画の世界から出て来た人間だとこの世界では戸籍は無い。日本で合法的になんらかの支援をしようとしても法的に何処の誰か分からないのではやりようがない。良い事では無いですが被造物を外国人として扱い在留資格を与えるのがやりやすい方法だと思います」
漫画やゲームなどの世界から現代の日本へ来てしまった被造物たちを協力者とする場合、日本での生活も考えねばならない。
国の保護や監視下にあってもある程度の自活はしてほしい。そうなると日本の社会で通用する身分が必要になる。
それが在留資格を持つ外国人に被造物を認定する事だった。

「では被造物の協力者に在留資格を与えると言う事を法務省や人事院へ伝えましょう」
「統括官、この際だから協力者を公務員の扱いにして給料が出るようにしましょう」
橋田は追加の提言をする。
「それは良いですね。これで直に給料を協力者に与えられます」
亜希は良い案だとして法務省と人事院へ伝える事項のメモに加える。
「橋田さん失礼な言い方だと思うんですが、これは協力者を日本の公的な傭兵にすると言う方向性ですかね？」
所沢は遠慮気味に訊く。
「そう言われるとそうだが・・・」
橋田は言葉に窮する。
「こう考えましょう。協力者に相応の報酬を支払う。単純に考えましょう」
亜希がこう言うと所沢は「そうですね」と少しすまなそうに答えた。
そこへ聡美が「会議中失礼します！」と慌てて入る。
「統括官！荻窪署が被造物に襲われました！」

東京都都杉並区荻窪にある警視庁荻窪警察署
ここで事件が起きた。
甲冑に身を包んだ金髪の白人女性らしい人物が馬に乗って警察署内に乗り込んで来たのだ。
まさに騎兵の如く馬で駆けて警察署へ突入して来た。
荻窪署の正面玄関で門番のような立番勤務をしている警官は「止まれ！」と叫んだが無視して署内突入を許してしまう。
馬に乗って現れた侵入者に署内の警官も落とし物を受け取りに来た一般人も呆気に取られた。
「創造主は何処だ！」
馬上の女は大声で尋ねる。
周囲へ呼びかけるが皆はただ戸惑うばかりだ。

馬に乗った甲冑姿の女が現れて現実なのかどうか理解が追いつかないのだ。
その女が尋ねる創造主はこの荻窪署に居た。
名前を高良田概と言う。
高良田は荻窪署へ「脅迫を受けている」と身柄の保護を求めた。
警察は高良田を別室へ招き事情を詳しく訊く面談を行った。
そこへ甲冑姿の女が馬に乗って現れたのだ。
「何故答えぬ！創造主を匿っているのを知っておるぞ！」
甲冑姿の女は苛立ちを高める。
それは警官が刺又を持ち拳銃を出して甲冑姿の女を囲んでいるのも余計に苛立ちを高めた。
「ただちに馬から降りなさい！」
荻窪署の刑事が高圧的に呼びかける。
「馬を降りよとは何だ！無礼だぞ！」
甲冑姿の女は苛立ちから怒りに感情が移る。刑事の高圧さと馬から降りろと言う指示が彼女の逆鱗に触れたらしい。
「無礼はそっちだ！馬で乗り込むなんて非常識だぞ！」
刑事も負けじと反論する。
しばし両者の口喧嘩と言える口論が続いた。
噛み合わない口論はただお互いの怒りの感情を徒に高めるだけだった。「お前に構っている暇はない！創造主を出せ！」
甲冑姿の女は馬上槍のような長く尖った武器を出現させて刑事の鼻先へ向ける。
「何をする！公務執行妨害と銃刀法違反で逮捕するぞ！」
刑事は冷や汗を出しながらも気力を振り絞り警告する。
「やれるものならやってみろ！」
それから荻窪署は嵐が吹き荒れた。
甲冑姿の女は刑事を含めた警官を薙払い自分を止めようとする者達を倒した。
どれも気絶させただけで殺しはしなかった。
だが彼女が探す創造主の居所を教える事は無かった。無理もない

創造主と言う意味が誰も分からないからだ。
「ならば、勝手に探すぞ」
甲冑姿の女は署内の壁を突き破り創造主である高良田を探す。
程なくして高良田は見つかり甲冑姿の女に連れ去られた。
これが荻窪署での事件の顛末である。
「これは酷い」
亜希は荻窪署へ来て被造物である甲冑姿の女が起こした惨状を目の当たりにした。
「統括官、荻窪署内のカメラが撮影した映像で被造物がどのキャラクターか分かりました」
聡美がタブレットＰＣで荻窪署を襲った被造物の正体を亜希へ見せる。
「漫画「緋色のアリステリア」の主人公アリステリア・フェブラリィです。連れ去られた男性はこの漫画の作者である高良田概のようです」
亜希はタブレットＰＣに写る戦国武将のような気迫を感じさせる絵のアリステリアを眺めながら頭痛を感じた。
警察署を襲撃し、そこから一般人が連れ去られる。
もはや軍服の姫君とセレジアにメテオラが起こした戦いで代々木体育館が損壊した事件を越えた事態だ。
治安の拠点である被造物にこんなにもやられたのだから。
（早く被造物の協力者を得ないと。この世界はただ壊されるだけだわ）
焦燥に近い危機感が亜希の中で高まる。

第7話「特別事態対策会議に改組する」

「警察署をこの女一人で破壊したのか。信じられん」
「大問題だぞ。警察署が攻撃されるとなれば治安は保てんぞ」
「ともかく、巡回の強化で署が襲われるのを防ぐしかあるまい」
アリステリアによる荻窪署襲撃事件はその日の夕方には警視庁と警察庁でそれぞれ上層部での緊急会議が開かれた。
内容は事件の内容を確認する事と不審者に対する警戒を厳にすべしと言う結論しか出なかった。
夜に開かれた東京都の公安員会と国家公安員会の緊急会議もほぼ同様の内容だった。
「この事案に対処している部署があったろう？アレはどうしてる？」
それぞれの会議で特別事態調査室が話題になる。
「新宿では機動隊と特殊部隊を使って逮捕しようとしたそうだが」
「そんな権限あったのか？」
「内閣府と警察庁を通じて警視庁へ要請して部隊を動かしたんです」
特別事態調査室についての認識を改めているとある考えが浮かぶ。
「この先を考えるとあのよく分からない者の逮捕や制圧の責任が我々に置かれるのはいかがなものだろうか？」
責任の所在である。
背負うにはリスクが重いこの事案を自分達で負いたくないと言っている。
それは参集した警察上層部の誰もが同じだった。
危険思想の過激な集団やテロリストならともかく、この世の者ではない漫画や小説・ゲームの世界から来た被造物との戦いで責任が取れるかと言う思いがあった。
「特別事態調査室に権限を持たせて警備や取り締まりの指揮をさせましょう」
「その提案を政府へ上げよう」

警察庁から出た特別事態調査室の組織を改編して権限を持たせると言う提案は国家公安委員会も同意して政府へと届く。
「特別事態対策会議ですか。私は何か異動や職務が分かるのですか？」
亜希は槙野に呼ばれて特別事態調査室が特別事態対策会議に改編されると聞いた。
荻窪署襲撃事件から五日後の事だった。
亜希も槙野も警察庁と国家公安委員会や政府内の動きを察知はしていた。
被造物に関する事件、第１０５号事案に関して今までに無く政治的な動きが活発になっていた。しかし当事者である亜希と槙野はあまり関わる事は無かった。
そこへ内閣官房副長官から特別事態対策会議へ改編すると通達が槙野にあった。
次いで内閣官房長官が直に槙野へ改編についての説明を受ける。
「荻窪署襲撃で我が国の治安は深刻な事態になったと政府は判断した。警察・自衛隊など治安や情報に関わる職長クラスが参集する。その職長達をまとめて被造物と言ったか、被造物による犯罪を取り締まって貰いたい」
官房長官の説明に槙野はある部分が気になる。
「職長達をまとめると言う事は私に何かの権限が与えられるのですか？」
「被造物の事件に関しての指揮監督の権限を与える」
「私が警察や自衛隊の部隊を指揮下に置けるんですね？」
「あくまで警察庁や防衛省など関係する省庁と協議した上でだがね」
「しかしそれでは緊急の時に遅れます」
槙野は協議に時間が費やされて被造物への対処ができない事を危ぶんだ。
「緊急時の事など必要な事は協議して決めたまえ。新しい法律が必要なら特別立法を成立させる」

「つまり自由にして良いと？」
「政府への連絡や相談はした上でな」
槙野は官房長官から自由裁量が自分にある事を知るが顔は険しくなる。
「分かりました責任者としてこの役目拝命します」
槙野は自分がこの第１０５号事案の責任を負うのだと覚悟した。
そうなるとは予想はしていたが現実に直面すると気持ちが改まる。
「菊地原君。引き続き統括調整官を務めてくれ。今までと違うのは我々がこの事案の対処や解決の牽引役になる」
今度は槙野が亜希へ役目を伝える。
亜希も槙野同様にこうなる事は予想していた。
「牽引役と言う事は作戦計画は私達が立てるんですね？」
「そうだ。菊地原君その立案は君に任せる」
「はい」
「責任は私が持つ。自由にやりたまえ」
「ありがとうございます」
亜希は役目の大きさと共に後ろ盾となってくれる上司に感謝した。
「久しぶりに見る名前ね」
特別事態対策会議の本格始動の準備に追われる亜希へ電話がかかる。
ジャケットの内ポケットから携帯電話を取り出した亜希は着信を確認すると久々に見る名前に懐かしさ感じた。
その名前は大月孝之と言う。
大月はフリージャーナリストで彼から取材の申し込みがあり会った縁がある。
週刊誌の記事や独自に取材して書籍を出している大月が専門とするのは社会問題や事件だった。
その取材は裏社会にも及び情報の人脈は広い。
警察官僚である亜希へ取材の申し込みが出来たのも大月が得た警察庁内の人脈があったからだ。
「大月さんお久しぶりです」

亜希は久しぶりの声での再会をにこやかに迎える。
大月も「ご無沙汰してます」と穏やかに挨拶を交わす。
「菊地原さん。内閣府へ異動になったんですね」
「ええ」
和やかな気分から警戒に入る亜希
「噂で聞いたのですが。内閣府にある新設の部署に菊地原さんが居るとか？」
「それについてお答えはできません」
亜希は冷めた態度になる。
「分かりました。ですが内閣府の新設部署について知っている事を教えてくれませんか？」
大月が特別事態対策会議について探っているのは亜希には分かった。
「それもお答えできません」
「つれないなあ。以前の借りを返すと思って少しだけでも教えてくださいよ」
大月は甘えた口調で亜希へねだる。
「すみません。何も言う事はできません。それでは失礼します」
亜希は大月との会話を強引に終えた。
マスコミの取材がここまで及んだ事に亜希は戦慄を感じた。

第8話接触した記者への対処

大月が亜希と会ったのは2年前になる。
「警察での女性の活躍について取材している」と亜希は上司と大月本人から聞いた。
亜希はそんな事もあるんだと取材に応じた。
大月は亜希に対して警察庁に勤める女性官僚はどんなものか質問した。
公安に関する機密は言わなかったが警察官僚をどうして志したか、普通の警官と何が違うかを正直に答えた。
その記事は警察について取材する週刊誌の連載記事に載り亜希は照れる思いをした。
1年後に再び大月と会う事になる。
公安の捜査で警察庁内と裏社会との繋がりが疑われる事があった。
状況証拠に過ぎないが裏社会の組織が警察庁の内情を知るにしては正確過ぎた。
警察庁内を洗う監査が行われる事になった。
亜希はその監査を行う立場だった。
何人か容疑者がリストアップされたが確証には至らなかった。
その際に亜希は大月の存在を思い出した。
裏社会と警察に人脈を持つ大月なら何か情報があるかもしれないと。
さすがに上司へフリーとはいえマスコミから情報を貰うとは言えなかった。
独断による依頼をしたのだ。
「あ～その繋がりですか。少し探ってみます」
亜希の要望を大月は快く引き受けた。
三日後に大月は裏社会と繋がる警察庁関係者について情報を与えた。
大月のネタは内部監査で疑惑を持つ人物の裏付ける事が出来た。
亜希はこれを大月ではない協力者から得た情報として上司へ提出し

た。
亜希は協力者へ渡す資金から出された金を大月へ報酬として渡しに大月と会う。
「私はお金よりもネタが欲しいですねえ」
大月は金を受け取らなかった。
「ですが今は渡せるネタはありませんよ」
「今じゃなくていいです。今度私がお願いするときにです。記事に出来るネタは私にとって一番欲しい報酬ですから」
亜希は困ったが頑なに金を受け取らない大月にはどうしようもない。
「言える部分だけですよ」
亜希は大月にこうして借りを作ってしまっていた。
「よりによって１０５号事案を探っているなんて。言える事は何もないのに」
亜希は借りがある気まずさを感じつつ困っていた。
完全にシャットアウトして近づけない方法もある。だが人情として借りは返したい。
しかし大月に言える情報は何もない。
荒唐無稽過ぎる上に被造物に対して治安維持が難しくなっていると公表する事になる。世間へ言える訳がない。
「記者か。それは困ったな」
亜希は槙野へ相談した。
「必要なら逮捕させるがどうするかね？」
槙野は亜希が大月をどうしたいか尋ねる。
「まだ逮捕は早いでしょう。しかし動きは監視するべきです」
「では警視庁へ大月の監視を依頼しよう」
まだ接触しただけの大月をとりあえずは監視する事に決めた。
「監視は分かるようにした方が良いと思います。これ以上の取材をしてはならないと察してくれるように」
亜希はそう提案する。
「だが大月は記者だ。警察の監視ぐらいで取材を簡単には諦めない

だろう」
「私もそう思います。止まらない場合は逮捕を要請します」
亜希は大月に対して借りはあるが治安を守る為の非情さは忘れて無かった。

第9話被造物を協力者として獲得する案を検討する

大月は都内にあるアパートから取材のために出かける。
道路に出るや大月は何処からか視線を感じた。歩けばその視線は背中から感じた。
（予想通りだが）
大月は亜希に接触した事で何らかの監視があるだろうと予想していた。
だが少し驚いたのは監視の人間が堂々と大月の前に現れた事だ。
まるで「俺達は見ているぞ」と示している事だ。
（まあ当然の行動だな）
監視をしているのは公安の捜査員だった。
大月は自分を止める為にあえて捜査員が自分の存在を見せていると分かっていた。
（でもこれぐらいじゃ諦められないな）
大月は背後の捜査員を引き連れている気分で街を歩き続ける。
大月と同じく尾行を受ける者が居た。
「ねえ？誰かに見られてない？」
セレジア・ユピティリアはメテオラ・エスターライヒに話しかける。
二人は気晴らしにと外を散歩している。
創造主である松原崇とまりねに出会い、まりねの家で暮すようになった彼女達
服装もようやくこの世界のものを着て外出ができるようになっていた。
だが誰かに見られている視線をセレジアは感じていた。
「私も視線は感じている。敵意でもない好意でもない視線」
二人が感じる視線は勿論公安の捜査員からだ。
大月とは違い対象から分からないように監視をしているつもりだった。
しかし常人とは違う身体能力があるセレジアとメテオラは注意深く行動している筈の公安捜査員の存在を察知しつつあった。

「私達の存在はこの国の役人に知られていると思った方がいいかもしれない」
メテオラの考えにセレジアは「あれだけ暴れたらね」と苦笑いする。
夜の都内で軍服の姫君との戦いに加えて、「マジカルスレイヤーまみか」の主人公まみかと白昼の戦いも起こしていた。
どの戦いでも爆発を起こし周囲の建物に被害が出る派手なものだった。
大都会でそんな事をすれば目撃される。
ＳＮＳでは空を飛ぶ姿や戦う姿が挙がっている。政府や警察が知らない訳が無いとメテオラは認識していた。
「私達は捕まるかな？」
「元の世界だと街の平穏を乱したと衛兵に捕まる。この世界も同じような理や法があるだろう」
セレジアはまた「ははは」と苦笑いを浮かべる。
「捕まるにしても颯太や松原・まりねに迷惑はかけたくないな」
セレジアの思いに「同感だ。恩を仇で返したくない」
二人は捜査員の視線を背中で受けながら今後起きるかもしれない事を案じた。
「ユピティリアとエスターライヒは現在、皇浦綾乃の自宅で暮しているようです」
特別事態対策会議の事務局では対策会議の正式発足を前に実務についての会議が開かれていた。
警視庁公安部より調査室の時から出向している秦野がセレジアとメテオラについての監視報告を行っていた。
「この皇浦綾乃と被造物の関係性は？」
亜希は秦野へ尋ねる。
「皇浦綾乃は〈まりね〉と言う名前でイラストレーターをしていて、〈精霊機想曲フォーゲルシュバリエ〉と言う作品のイラストを担当しています。この〈フォーゲルシュバリエ〉のヒロインがユピティリアになります」
「つまり自分を創造した人間を頼って住まわせて貰っているのです

ね」
「そうだと思われます。皇浦と被造物を引き合わせたのが〈フォーゲルシュバリエ〉の原作者である松原崇です」
公安は松原がまりねの自宅があるマンションへセレジアとメテオラを送っている所も監視していた。
「この少年は何者かね？」
槙野が画像に移る眼鏡の少年を指して尋ねる。
「高校生の水篠颯太であるとは特定しましたが創造主と被造物との関係がどうなっているのか不明です」
槙野は「そうか。未成年もこの事案に絡んでいるか」と少し悩ましく気に言う。
「この5人についての対処をどうするかですが」
亜希が槙野や集まる面々へ問う。
「被造物に関しては器物破損の容疑で逮捕はできるでしょう」
橋田が答えた。メテオラに問えるとされていた銃刀法違反は盗まれた装備を「納入前で駐屯地に無い装備」として防衛省が処理したので適用ができなくなっていた。
「他の3人は犯人隠避罪を適用して逮捕は難しいですね。被造物の起こした事件は公になっていませんから」
荻窪署襲撃事件も火災だとして報道させるなど被造物の起こした事件は報道管制を敷いている。そうなると事件を知らなかったと言う方便も通るからだ。
「逮捕か。大人しく捕まるとは思えん」
荒井の指摘に警視庁からの出向組が頷く。
「皆さん。議論が捕まえる方向ですが私は彼女達を味方にしたいと考えています」
亜希が提案を出すと周囲の反応は意見を更に聞こうとする構えになる。
橋田など一部とは以前からセレジアを協力者にしたいと考えを伝えていたので反対する者や驚く者は居ない。
「できるかね？」

槙野は質す。
槙野は亜希からセレジアを協力者にしたいと言う考えを聞いていた。だが荒井など亜希の考えを聞いていない者の意志を代弁する。
「会って交渉しないと味方になるかどうか分かりませんが、ユピティリアの性格が小説の設定どおり正義感が強いなら味方になる可能性は高いです。エスターライヒも知性が高く主人公を導くと言う設定です。交渉によって味方に引き入れるのは可能だと考えます」
亜希の提言に周囲は納得はするが不安げな表情だ。
「作り物の人物とはいえ設定通りの感情のままだろうか？心変わりをするかもしれない」
荒井は亜希へ疑問を投げかける。
「ありえると思います。ですがそこは直接会って確かめなければなりません。まずはアプローチをするべきと考えます」
亜希の答えに「なるほど」と言って反論はしなかった。
「警察の力では被造物に対して限界があるからな。味方にするプランを進めたまえ菊地原君」
槙野はまとめに入る。
「ありがとうございます」
以前からの根回しもあってセレジアを協力者として味方に引き入れる計画がこうして実現に向かう事になった。
「これより特別事態対策会議の設置に関する関係会議を開きます」
亜希はようやく発足した特別事態対策会議の最初の会議で進行役を務めていた。
集まる面々は警視庁警備局長に統合幕僚長・総務省総合通信基盤局長など治安や情報の関係部署の局長級だ。
つまりある程度の決定権を持つ人々がこの場に居る。
被造物に関する対応がようやくここまで進展したのだ。
「統括調整官、質問があるのだが」
挨拶と１０５号事案に関する情報についての説明が終わると広田警視庁警備局長が亜希へ質問する。
「被造物と呼ばれる者達は何を目的にこの騒擾を起こしているのだ

？」
「それについては不明です。どの被造物も同じ作品のキャラクターではなく敵対する関係性は薄い筈です。これは互いに意見の相違が起こり騒擾に発展したものと事務局では推測しています」
亜希はそう答えたが被造物達が何を目的に戦い合うのか何も分からなかった。
建物などへの被害が生じるのも被造物同士の戦いによる巻き添えであって破壊を目的にしている訳では無いようだ。
「被造物の目的が分かれば対応策を立てやすい。被造物から情報を得る機会が必要だ」
東村内閣情報官が言う。これに参集した誰もが同意する言葉や頷きをする。
早々に被造物を協力者として味方にする案を出せる流れになった事で亜希は内心で微笑む。
「事務局としてはそうした情報収集も含め被造物への対応に協力する協力者を被造物から引き込もうと考えています」
亜希の提言に広田や東村は「それは良い案だ」と賛同する。
「では被造物の協力者を獲得する決議を内閣へ建議します」
こうして1回目の対策会議の会合は亜希にとって望む方向で進み終える事ができた。

第１０話「巨大駆動体出現ス」

「これは貴方の宿命なのです」
白いドレスを着た長い金髪の少女が告げる。
「俺の宿命だと!?この戦いが俺の使命だと言うのか?」
少女のお告げを聞くのは剣を持つ少年だった。つい先ほどまで剣を交えた戦いをしていたせいか腕や足に頬に斬られた傷があり出血している。
戦いの修羅場を終えた直後のせいか気が立つ少年は荒い口調で少女のお告げに応える。
だが本心も素直に受け止めてはいなかった。
「だが俺が倒したのは同じ騎士団の仲間だ。これが俺の宿命なのか!?」
少年が剣を交えて倒したのは戦友となる筈だった肩を並べ背中を預ける事になる同じ騎士団の仲間達だ。
だが仲間と思っていた彼らは少年に襲いかかった。
「そうです。この宿命を乗り越えなければ貴方も私も、そしてこの国も明日はありません」
少女は毅然と言い放つ。
「俺の宿命って何だ?俺でなければならないのか?」
少年は少女へ噛みつくように問いかける。
「今はこれだけは言えます。貴方でなければ果たせない宿命なのです。そして私には貴方が必要なのです」
「俺でなければならないだと・・・」
少年は自分に背負われようとする宿命に背筋が震えた。
「今の私はこの少年かしら」
亜希は自分の住むマンションに帰る途上の地下鉄の車内で文庫本を読んでいた。
この本こそ亜希が被造物の事件に関わったきっかけになる。
タイトルは「ドグラーナ戦記」
サスペンス小説を主に書いていた作者が初めて書いたファンタ

ジー小説で話題を呼んだ作品だ。
亜希はその作者のファンで今まで読んだ事が無いファンタジー小説を初めて読む作品となった。
ストーリーは中世ヨーロッパな世界観の架空の王国で陰謀により殺されそうになる姫が騎士の少年と共に困難を乗り越え王国の危機を救うと言う内容だ。
主人公である騎士の少年は姫を守るのを使命と定めた一族の出身で姫を守る宿命があったのだ。
生まれながらに背負っていた宿命によって過酷な戦いに挑む事になる主人公の少年と亜希は自分の立場を重ねていた。
もはや逃れられない立場と責務と言う意味で同じだと思えたのだ。
「ドラグラーナ戦記」の主人公は姫に他の仲間と共に数々の困難を乗り越えて行く。
亜希には事務局に部下や共に働く人たちが居る。
彼らを従え協力を得て困難を乗り越えねばならない。
だが力が足りないと思える。
「あのキャラ、いや人達を味方にできれば・・・」
セレジアやメテオラの顔が浮かぶ。
別世界から来た被造物と対するにはやはり被造物しかないと亜希は思っていた。
だからこそセレジアやメテオラを味方にしようと働きかけている。
それは「目には目を歯には歯を」と言う単純な論理でもあったが「ドラグラナーナ戦記」の影響もある。
中盤において敵と思えていた強い魔術師を主人公の少年と姫が説得して味方にできたストーリーを思い出したからだ。
「私はそなたらに組せぬ」
魔術師は主人公の少年を最初はそうあしらった。
「どうしても貴方の力が必要なのです」
姫も説得するが魔術師は首を縦に振らない。
「あの魔術師が敵に回ると厄介だ。いっそやってしまうか」
味方にならない魔術師に仲間から倒すべきだと意見がでる。

「俺は味方にしたい。あの人の力は絶対必要だ」
主人公の頑固とも言える考えによって説得が続く。
だが別の場所へ行かねばならず説得は中断する。
そしてまた戻って魔術師へ説得に向かった。
「そなたの振る舞いを見ていた。未熟だがそなたは紳士であるな。そなたと共に戦おう」
魔術師は主人公がどんな戦いや現地の人や仲間へ接するか見ていたのだ。その振る舞い方を魔術師は気に入ったのだ。
この場面を思い出し難しい相手でも説得でるのではと亜希は思うようになっていた。
「でも現実は話の通じない人が多いけどね・・・」
地下鉄を降り住んでいるマンションの近くにあるコンビニで晩飯となる弁当と共に晩酌となるチューハイをどれにしようか選びながら現実を思う。
ただため息しか出ない。
それでも被造物がどんな性格でも話が通じると信じたい。
「自治体から問い合わせがありまして。アニメかマンガに出てくる大きなロボットのようなモノが自治体が管理する野球場に置いてあるそうです」
特別事態対策会議事務局へ一本の電話があった。
それは総務省からの電話だった。
事の始まりは関東地方のある町で自治体が管理する野球場へ自治体職員が見回りに来ると球場の中に巨大なロボットのようなモノが立っているのを見た。
何か映画の撮影に使うセットなのかとその職員は思った。
「何か撮影のセットですかね?大きなアニメに出そうなロボットみたいなモノが球場にありましたよ」
その職員は役所へ戻ると上司へそう報告した。
何気ない会話だったが上司はある事を思い出した。
総務省に居る大学時代の先輩からアニメやマンガの格好をした珍妙な連中が出て来て暴れているらしいと聞いていた。

何か関係があると思いその上司は総務省の先輩へ連絡を入れたのだった。
「ロボットが？ロボットが出たか。公にして無いがそういうのに対応する部署があるんだ。そこへ連絡しておくよ」
こうして総務省から特別事態対策会議の事務局へ連絡が届いたのだ。
「まずは確認をしましょう。防衛省に連絡を」
聡美から総務省の問い合わせを聞いた亜希は荒井へ連絡を試みる。
「荒井さん。自衛隊で素早く偵察が出来る所はありますか？」
中乃鐘昌明は困惑していた。
その困惑している対象は自宅に居た。
ダイビングスーツのような全身に密着したグレーのスーツを着た少年がそれだ。
見知らぬ人間では無かった。
名前は鹿屋瑠偉、中乃鐘がよく知る少年だった。
何故なら中乃鐘が脚本担当として制作に関わっているアニメ「無限神機モノマギア」の主人公なのだから。
まさに自分が作ったキャラクターが自宅に居る不思議な状態を中乃鐘は体験している。
事の発端は中乃鐘が自宅のテレビで「モノマギア」を視聴中に映像が乱れ見知らぬ軍服の少女のキャラクターが出て危険を察したところから始まる。
危険の元と見たテレビを自宅から放り投げた瞬間だった。
テレビから巨大な物体が飛び出した。
これも中乃鐘にとっては見慣れたモノだった。
「モノマギア」に登場する巨大ロボット「ギガスマキナ」だった。そのギガスマキナのコクピットから出てきたのが鹿屋だった。
中乃鐘の自宅は周囲に隣家が無い地域なのでギガスマキナが出現して近所の迷惑になる事が無かったのが中乃鐘にとっては幸いだった。
ギガスマキナを近所の野球グラウンドに置いてもらい中乃鐘は鹿

屋を自宅に招いた。
とりあえずコンビニで買った弁当を鹿屋に食べさせているがどうしたものか中乃鐘は悩む。
自分の作品のキャラクターが自宅に巨大ロボットと共にやって来た。
そんな事を相談しようにも非現実的過ぎて自分の精神状態を心配されるだろう。
それでも誰か相談できる人はいないか。
中乃鐘は作家である松原崇を相談相手に選んだ。
同じ架空世界を舞台にした創作を行う彼なら荒唐無稽な相談でも聞いてくれるだろう。中乃鐘は携帯電話を取り出し松原へ電話をかけるのだった。
１機のＲＦ－４／ＥＪ偵察機が東京近郊の空を飛行していた。航空自衛隊の偵察機が飛行しているのは訓練ではなく任務だ。
ＲＦ－４に乗るパイロットに与えられた任務はある地点の撮影だった。
撮影は機体の下部に装備したセンターラインポッドのカメラで行う。だが何を撮影するかは聞かされていない。
ただ指定された地点で撮影せよと言う奇妙な命令だった。
「こんな命令は初めてですね」
ＲＦ―４のコクピットでは乗っている二人のパイロットは自分達が行っている任務について話していた。
「そうだな。撮影でこんな命令は初めてだ。訓練名目でただ映して来いとは」
偵察機であるＲＦ―４は災害派遣で被災地の状況を撮影する事が多い。
だが今回は被災地では無い異常が無いと思われる地域を訓練を名目に撮影せよと言うのだ。
そんな任務を与えられたパイロットは困惑しながらも遂行するしかない。
「そういえば、Ｆ―１５に乗っている連中も実弾装備で夜間飛行訓

練に出されたとか」
これは新宿で軍服の姫君と戦う警察の任務に介入しようとした時の事だ。
「何かおかしいですよね」
「ああ、おかしいな。有事が近いのかもしれん」
一抹の不安を抱きながらＲＦ－４のパイロットは撮影の作業に入る。
人工密度が低い地域とはいえ低空での撮影は禁じられ高度３０００ｍからの撮影となる。
パイロットは指定された地域に到達するとカメラを作動させ撮影を開始した。
彼らは何の為に撮影をしたのか分からないまま基地に帰還し教えられる事は無かった。
２時間後には海上自衛隊のＯＰ－３Ｃ多用機が飛来し旋回しながらＲＦ－４が撮影した地域を４時間撮影と監視を行った。
この空自と海自の偵察機が飛来したのは中乃鐘の自宅がある地域だ。
これは大月から亜希へもたらされた巨大ロボットの情報、つまりギガスマキナの情報を確認する為だ。
巨大なロボットとなれば国民の安全に関わるとしてＲＦ－４による偵察が緊急で行われた。
ＲＦ－４が撮影した画像には野球グラウンドに巨大ロボットが鎮座している画像があった。
更なる詳細と監視にＯＰ－３Ｃが岩国基地から厚木基地に展開して活動を開始した。
特別事態対策会議の事務局が特別事態調査室だった頃から「分析班」なる部署があった。
分析するのは出現した被造物だ。
被造物がどの作品のどのキャラクターなのかを分析するのだ。
分析できるのはアニメやマンガ・ゲームに精通した所謂オタクと呼

ばれる人々だ。
その人々は密かに各省庁から探し出された。
とはいえ分析ができるほどにアニメ・マンガ・ライトノベル・ゲームに精通しているオタクを選抜するのは並大抵ではない。
そのオタクを選び出したのは分析班の班長である大森和子警部補だった。警視庁生活安全部少年育成課から出向した彼女は第１０５号事案が警察内部でＸ事案と呼ばれていた頃に被造物がマンガやアニメのキャラクターであると報告書をまとめたのも彼女だ。
その彼女が特別事態調査室分析班の班長に指名されると巡査部長から警部補に昇進する。
今では警察・防衛・経産省・文科省から出向したオタクな官僚達を束ねる班長となっている。
「大森さん。今回はロボットですよ」
聡美は防衛省から届いた画像のデータを入れたＳＤカードと画像を印刷した紙を分析班に持ち込む。
分析班という部署ではあるが常設ではない。
事務局が必要とした時の呼び出しと分析班が定めた日に分析班の面々は集まる。
今回は前者で大森をはじめ分析班は呼び出しを受けて事務局のある内閣府の庁舎にある会議室へ参集していた。
「ロボットは専門外だな」
大森は印刷されたＲＦ―４が撮影した画像を睨みながら言う。
彼女の専門はゲームやマンガのキャラクターである。
「小野君分かる？」
大森は文科省の小野へ画像を見せる。
「これはギガスマキナですね」
小太りな小野はかけている眼鏡をクイっと指で押し上げながら答えた。
「詳しく言うとアニメ〈無限神機モノマギア〉に登場する主人公の乗るロボットなんですよ。これは」
「ストップ、とりあえずストップ」

大森は止まらない様子の小野を止めた。
「小野君、このロボットの武器は？」
呼吸する間を空けてから大森は小野へ再び尋ねた。
「ホーミング機能があるビーム砲に粒子加速砲があります。どれも強力なビーム兵器と見て間違いないですね。とはいえギガスマキナは格闘戦ができますが」
「ビームか・・・自衛隊じゃ厳しいだろうなあ」
防衛省からの出向者も居たが自衛隊の装備品や作戦には明るくない背広組だった。
「このロボットのパイロットは？」
すると今度は経産省の近田が小野より先に答える。
「パイロットは鹿屋瑠偉くんなんですよ」
「あ～近田さん。こういうの好きだっけ」
大森は理解した。
「鹿屋くんはですねえ～やんちゃな性格なんですけどかわいいんですよ」
「近田さん。官僚の自覚を」
大森は少し呆れながら言った。
「すみません。結構推しなキャラなんで取り乱しました」
近田は気分を落ち着かせる。
「鹿屋瑠偉は分かりやすく言うとキレやすい性格なんです」
「そんなに荒れた子なの？」
「ギガスマキナのパイロットとして戦う事を強いられた事もあって周囲へ反発するようになったのです。大人達から無理矢理戦えと言われて責任を負わされるんです思春期の少年なら荒れますよ」
「つまり気難しい子なんですかね？」
「無限神機モノマギア」についてあまり知らない聡美が尋ねる。
「確かに難しい子だけど根は良い子なんです。完全に心を閉ざしている訳でもありません」
「話はできるのですね」
「おそらく」

聡美は聞きたい事を聞いて納得する。
「高江さん。このロボットとパイロットを味方にするつもり？」
大森が聡美へ訊く。
「菊池原さんは被造物をできるだけ味方にしたいみたいです」
「当然ね。私でもそうする。常識外れの超人、いや人外だってありえる。そんなのが魔法まで使うんだし現実世界の武力なんて無力、同じ者同士ぶつけるのがベスト」
大森の考えに分析班の皆は同意の頷きをする。
「でも本当に味方になるかはまだ分からないですけど」
「セレジアとメテオラなら話せばすぐ味方になるんじゃない？」
聡美に大森は問いかける。
「その二人が一般人と一緒に居るんですよ。だから接触は慎重になっているんです」
「一緒に居る羨ましいのは誰よ？」
「原作者や原作のイラストレーターに事情は分かりませんが男子高校生です」
「原作者か、生みの親の所ねえ。接触し辛いのは男子高校生と言う未成年が居るからが大きそうね」
大森の推測に「そうなんですよ」と聡美は肯定する。
「国家の機密に関わる部分に未成年者を巻き込んでいいのかと事務局内でもまとまってないんですよ」
「ふーん。だけどこれがラノベやアニメならその男子高校生は主人公だよねえ」
「私もそれ思いました」
意見が合い大森と聡美が笑い合う。
「ねえ高江さん。分析班に来てよ適職なのになあ」
大森が冗談混じりに誘う。
「お誘いありがとうございます。けど今はこのオタクな事件をオタクじゃない上司が賢明にやっているんです。オタクな私が補佐しなければいけませんからね」
聡美は微笑みながら答えた。

数時間後に亜希は特別事態対策会議事務局の会議に出ていた。
亜希をはじめ関係者の手元にはギガスマキナと鹿屋について分析班が作成した資料が置かれている。
「巨大ロボットの観測は海自のＯＰ－３Ｃに加えて本日から陸自の偵察部隊が無人偵察機を使い活動を開始します」
自衛隊の報告として荒井が連れて来た野沢二等陸尉が行う。
ギガスマキナへの監視は自衛隊が主に行っていた。それはギガスマキナが敵対行動または都市部へ向かい動き出した時に即座に対処する為だ。
「現在自衛隊は防衛大臣が発した治安出動待機命令による情報収集（自衛隊法７９条の２「治安出動前の情報収集」）を展開中だ。だがあの巨大駆動体の突発的な動きに備えて実戦部隊の出動準備も治安出動待機命令として進めている」
荒井が報告する。
治安出動は日本の治安が警察では保てない場合の自衛隊出動を意味する。
ギガスマキナが警察では制圧できないであろうと判断してである。
「公安から報告します。「ギガスマキナ」と称するロボットもとい駆動体が登場するアニメ作品の制作に関わった人物がロボットの近くに住んでいる事が判明しました」
泰野が報告する。
自衛隊が撮影した画像で巨大ロボットがギガスマキナだと判明しギガスマキナが登場する作品も判明すると中乃鐘の存在が公安の捜査線上に浮かんだ。
「名前は中乃鐘昌明、巨大駆動体の登場する〈無限神機モノマギア〉では脚本を担当しているスタッフです。中乃鐘の自宅に駆動体を動かしている被造物など関係者が居ると思われます」
「事情聴取を行うか、家宅捜査で入るか」
所沢が中乃鐘への警察としての行動を考えた。
直に聞くか直に入って調べるかだ。
「出来るだけ穏便な接触を図りたいと考えています。分析によれば

巨大駆動体のパイロットである被造物はかなり感情的な性格とあります。中乃鐘氏を連行または自宅への立ち入りが被造物の感情を刺激して駆動体が暴れる事態は避けたいです」
亜希は鹿屋の性格から穏便な方向性を示した。
だが異論がすぐに出る。荒井だ。
「統括官、のんびり家から出てくるのを待つ時間は無いと考える。ロボットのパイロットなり関係者がどんな意思を持っているのか不明だ。それにあの巨大な物体がいつまでも世間に知られない筈もない」
「では防衛省の考えは？」
「中乃鐘氏と被造物への接触とロボットの確保を行うべきだ。今すぐにでも」
荒井の意見に亜希は「しかし」と言いたかったが時間の猶予が無いのは事実だ。一般人の幾らかがギガスマキナの存在を知っているだろう。
もしも多くの人々に知れ渡れば見物人が押し寄せ警察や自衛隊による対処が難しくなる。
「公安としても防衛省の意見に賛成だ。荻窪署から作品の作者である一般人が拉致された件もある。中乃鐘氏が監禁または脅迫などの強要された状態に置かれている可能性もある。早急な行動が必要だと思います」
泰野は荒井に賛同する。
「報道関係も巨大ロボットの存在を知っているようだ。これ以上の長期化は報道規制が難しくなる」
総務省情報流通行政局長がマスコミの動向を述べる。
人口の少ない地域とはいえ急にあんな巨大な物体が出現したのだ。誰の目にも触れない訳がない。
「では事務局としては対策会議を召集し巨大駆動体及び搭乗者の確保を自衛隊を出動させ行うと上申します。よろしいですか？」
亜希は意見が出るのが収まると結論をまとめる。
反対意見は無い。

「では対策会議の召集を行います。事務局は会議の準備と関係機関の連絡に移ってください」
亜希は指示を出すと一時退出する。
ふうとため息を吐き亜希は右手を額に当てる。
「大丈夫ですか？」
聡美が亜希を心配する。
「大丈夫よ。ただこの後の事で頭が痛いだけ」
「自衛隊の出動で事態が大きくなる事ですか？」
聡美の推測に「そう」と亜希は答える。
「分析班の報告が確かなら自衛隊の出動で威圧をかければ被造物の鹿屋は逆上して暴れるかもしれない。そうなれば自衛隊は大規模な攻撃で制圧する事になる。もうこの事件は世に広まる」
「秘匿性が失われる危険性ですか？」
「それもあるわ。だけど大々的な報道をして被造物の存在が当たり前になれば被造物達は今より出てくるようになるかもしれない。そして超人的な能力で白昼の東京で何度も戦いを繰り返せば警察も自衛隊も抑えられない。治安秩序は崩壊する」
亜希の懸念に聡美は戦慄する。
亜希以上に被造物と称するアニメやマンガ・ゲームなどのキャラクターがどんな能力があるか知っている。
その能力を持つキャラクターが堂々と現れて東京の各地で暴れれば手がつけられない。
それは守るべき国民の犠牲が多く生じる事と国家の安定を崩す事も意味する。
「最悪の状況の一歩手前ですね」
「そうだと思うわ。米軍の介入や政府機能を東京から移転する事も視野に入れるべきかもしれない」
役人として為政者の補佐役である亜希は見える最悪の事態に頭を痛めていた。
（この困難に立ち向かうのが私の宿命なのかしら）
亜希はふと「ドラグラーナ戦記」の主人公を思い出していた。

第11話統括調整官被造物への説得に向かう

数日前、荒井は政権与党の党本部で開かれた防衛部会に出席していた。

与党の国会議員達が集まり安全保障についての意見交換を行う部会だ。

軍備の拡大を続ける中国に新型弾道ミサイルを配備した北朝鮮についての話が主な議題であった。

「ロシアも北方領土で対艦ミサイルを配備し実行支配を強めている。日本の安全保障は常に脅威に晒されている事を今一度考えて貰いたい」

この防衛部会の会長である須崎衆院議員はこう今回の部会をしめくくる。

与党の防衛族では筆頭と言える存在だ。

タカ派と言う訳では無いが近年では憲法改正に絡んで自衛隊の武力行使をより行えるべきという意見を出している。

「荒井君、少しいいかい？」

そんな須崎から部会が閉会した後で荒井を呼び止めた。

「はい大丈夫です」

「最近君が所属するようになった部署について話がしたい」

「分かりました。ですが人目を避けた場所で」

荒井は須崎が特別事態対策会議の事で話がしたのだと分かった。

須崎は党本部内にある自室へと荒井を招く。

須崎は党の副幹事長なので党本部内に副幹事長としての部屋があるのだ。部屋には

「聞いた話ではデカイのが出現して自衛隊が治安出動待機をやっているそうじゃないか」

須崎はギガスマキナについて言っている。

「はいそうです」

極秘とされている事だがもはや陸自と空自の実戦部隊が有事に備えて待機している。隠すには大きな動きになっていて何処からか知

られるのは時間の問題と言えた。
特に治安出動待機の命令を下した政府に近い政権与党の幹部となると尚更だろう。
だから荒井は須崎がギガスマキナの一件を知っていても驚きはしなかった。
「荒井君、あれをどうするつもりなんだ？」
「あの巨大駆動体、ロボットのパイロットを説得して味方に引き入れる事になっています」
「できるかのかね？」
「分かりません。私が貰った資料ではパイロットは感情的でキレやすい少年だとありました」
「キレやすい少年が簡単に味方になるとは思えんな」
須崎は否定的だった。
「荒井君らが居る対策会議が対処している被造物とやらをここらで一度大いに叩く必要があると私は思うのだがね」
須崎はこう言う。
荒井はようやく本題が出たと分かった。
「その大いに叩く役目は自衛隊にですか？」
「そうだ。新宿で警視庁が発砲しても捕まえるどころか逃げられたそうじゃないか。もはや被造物には自衛隊で対処するしかあるまい」
政権与党の幹部となると極秘にしている情報は色々と入るようだ。
「しかし相手は普通ではありません。制服の方は銃弾やミサイルが効くのか疑問視しています」
「自信がないと制服組は言うのか？」
「はい。なので菊地原統括調整官の提案で説得を試みると決まったのです」
「しかしだ。被造物とやらは躊躇い無く力を使っている。荻窪の警察署も襲われたじゃないか。このままでは被造物によって治安は崩壊するじゃないか」
「ごもっともです。菊地原は被造物には被造物で対処すべきと言っています」

語気が荒くなって来た須崎に荒井は亜希の案を今一度伝える。
「それは合理的な案だが力関係は上下が生じると禍根が残るぞ。被造物のおかげで助かったと言うのは避けねばならん」
「借りを作らないために自衛隊を使うと？」
「そうだ。こちらにも力がある。守って貰うだけの存在ではないと見せねばならん」
間違ってはいない。荒井は須崎の考えは納得できた。
だが力を使う。武力行使を行い失敗すれば須崎の言う上下関係は悪い意味で形ができてしまう。
「先生、あの巨大で不明な物体に自衛隊が勝てると思いますか？」
「分からん。だが政治家として脅威を放置はできない。何もせず静観するのも国を乱れさせる」
「やらないよりもやるべきだと？」
「ああ、武力行使は意思表示でもある。被造物の勝手気ままにはさせんと言う意志をな」
「先生のお考え理解できました。しかし役人である私には先生の考えを菊地原などへお伝えする以外できる事はありません」
荒井は須崎が何かを言い出す前に予防線を張る。
「伝えるだけでいいんだよ。私の意志を伝えるだけでいい」
「はあ」
荒井は要領を得ないと言う態度を見せたが須崎が自分を特別事態対策会議の事務局内でコンセンサスを作れと暗に言っていると思えた。
「政府や関係する所へは私が話をする。俺は何としてでもあのデカイのに倒すかせめて一撃を加えたい」
須崎のどこか執着めいた思いに荒井はヤレヤレと少し思えた。
その熱心さで現場が動かされるんだと。
「以上の点から危険性が高いと判断し事務局としては自衛隊による駆動体ならびに駆動体の搭乗者を確保するべきと言う結論に達しました」

召集された特別事態対策会議で亜希は事務局の結論を報告する。
事務局の出した結論が会議の検討内容となる。
「警察ではダメなのか?」
法務省大臣官房司法法制部司法法制課長が尋ねる。
「もしも駆動体が動いて搭乗者の接触や身柄確保を妨害した場合に警察では対処ができません。自衛隊の実力が必要と判断しました」
「確かにあの大きなモノが動いたらミサイルや砲弾の方が有効ですな」
広田警察庁警備局長が亜希の答えに同意する。
「あの巨大な駆動体に自衛隊が必要なのは分かりました。法務省としてはどういう法的根拠で自衛隊を出動させるかが問題と考える。」
司法法制課長は更に問う。
「事務局では治安出動での出動が妥当であると結論を出しました」
亜希が答える治安出動は警察力だけでは治安維持ができない状態の時に総理大臣の命令まったは都道府県知事の要請で自衛隊が出動する事を指す。
「それは妥当と考えます」
司法法制課長は事務局の案に同意した。
自衛隊の出動は防衛出動・治安出動・警護出動・海上警備行動・災害派遣がある。
防衛出動は侵攻して来た外敵と戦う為の出動
治安出動は国内の治安が警察だけでは保てない時の出動
警護出動は自衛隊施設またはアメリカ関連施設(在日米軍基地や米大使館など)を警護する為の出動
海上警備行動は海上保安庁だけでは海上の治安を保てない時の出動
災害派遣は自衛隊が被災地の救援などを行う為の出動
こう分かれている。
ギガスマキナとそのパイロット鹿屋瑠偉は「無限神機モノマギア」の中では何らかの組織に属しているらしいが防衛出動の根拠となる「国または国に準ずる組織」と言う対象にするには根拠が無い。現実

世界には実在しないからだ。
そうなると治安出動が妥当となる。
ギガスマキナを押さえ込む力が警察には無いからだ。
治安出動の条文である自衛隊法第７８条「一般の警察力をもっては治安を維持することができないと認められない場合」を事務局の法務担当である橋田がギガスマキナに対する自衛隊出動の根拠にすると提案した。
「治安出動ですか。しかしあのロボットいや駆動体を撃破するとなれば戦車や対戦車攻撃ヘリが必要ですね」
自衛隊の代表者として出席している佐竹統合幕僚長がこの件について初めて口を開いた。
「大規模な戦力が必要ですか？」
亜希の問いに佐竹は「はい」と答える。
「この資料や偵察の画像を見ても駆動体がどれだけの装甲を持っているか不明だ。戦車も火砲も航空機も多く投入し火力を集中する必要があります」
「ピンポイントで一撃とはいかないですね」
分析班の資料も見てギガスマキナを容易に倒せない事は亜希にも想像できた。
「そこで提案なのですが、まずは駆動体の搭乗者を特殊部隊で身柄を確保できれば事態を最小限に納められると思います」
亜希は佐竹の提案に即答しなかった。
「私は統合幕僚長の意見に賛成だ」
広田がまず賛同した。
それから何人かが続けて賛同の意を示す。
「事務局として提案があります」
亜希は割り込むように言い出す。
「自衛隊による作戦に前に駆動体の搭乗者と接触してこちらの保護下に置く事を承諾して貰うのはどうでしょう？」
この事務局からの提案というのは亜希の独断だった。
鹿屋の性格から圧力をかければ感情を刺激して暴れるかもしれな

いと亜希は不安だった。
だが事務局も対策会議も自衛隊による圧力や実力行使に向いている。それは事態の拡大によって他の被造物が触発されて行動が激化するのを亜希は恐れていた。
だから亜希は独断で事務局案をでっち挙げたのだ。
「統括調整官、誰がその搭乗者と接触し交渉するのかね？」
槇野が亜希へ尋ねる。事務局の案や議事を知っているだけに唐突な亜希の提案を問いただしている。
「私が行きます。対策会議の代理として参ります」
亜希の申し出に槇野も誰もが驚く。
「危険です。他の代理を立てるべきだ」
広田が反対する。
「いえ、この事態全般を把握している私こそ交渉に適任だと思います」
「しかし相手が逆上してしまうと危害を加えるかもしれない」
広田はそれでも反対する。
「接触と交渉をする事は良い案だと思う」
賛意を示す意見が出た。
大木公安調査庁調査第一部部長だ。
「搭乗者の性格が感情的だとしてもアニメの登場人物でも話はできる筈だ」
「話して分かれば良いですが」
大木の意見に広田は難色を示す。
「交渉に賛成だ。武器使用を行うような事態を回避できるならば」
佐竹が交渉案に賛同した。
佐竹としては実力が不明でありビームを放ちや飛行も可能なギガスマキナと一戦を交えるのに自信が無かった。
自衛隊の総力を挙げてもギガスマキナを止められないのではないかと思っていた。
だからこそ亜希の交渉案に乗ったのだ。
「事をそこまで荒立てず収拾できるなら交渉案に賛同する」

渡邊内閣府政策統括官が交渉案に賛同した。
「意見が分かれているようだな」
槙野は亜希へ小声で言う。
亜希は調整官としてまとめねばと自覚する。
「方針を定めたいと思います。自衛隊による実力行使に賛同の方」
「被造物へ接触し交渉する事に賛同の方」
賛成の数は交渉案が多かった。
「ありがとうございます」
亜希は思わず自分の案への賛成が多い事で謝意を示した。
「交渉が第一だが最悪の事態に備えて自衛隊は待機させるべきだろう。防衛大臣に実働部隊の治安出動待機を要請しよう」
槙野は会議の最後にこう決めた。交渉が決裂した場合に備えてである。
「本当に君が行くのかね？」
会議が散会した後で槙野は亜希に尋ねた。
「はい。私が事態を一番把握していると自負しています。交渉は私が行くべきです」
槙野は亜希が珍しく自信を持って積極的だと感心する。
亜希が消極的と言う訳では無いが自分の領分を越える事をそうしないと思えていたからだ。
「良かろう。代表者として行って行ってくれ」
槙野の返事に亜希は「ありがとうございます！」と頭を下げた。
「では早速、明日の朝会いに行きます」
いつにないやる気を見せる亜希
槙野は頼もしいと思えて笑みを浮かべた。
亜希がここまでやる気を見せたのはギガスマキナの騒動が公になり被造物が堂々と出て暴れ社会秩序が崩壊する最悪の事態を避けると言う意味もある。
もう一つの理由は被造物にと直接話ができる機会だからだ。
被造物の事件に対処する役目とはいえ当の被造物には未だ会った事は無い。

新宿で機動隊と軍服の姫君と一戦交えた時に侮辱的な言葉を投げられたぐらいしかない。
公安にしても被造物へ接触できてない。
そうなるとギガスマキナの鹿屋と会うのはこの上無いチャンスだった。
鹿屋が分析班が出した資料のように気難しい性格であっても直接会って少なくとも社会の敵にならないようにできればと亜希は思っていた。
「本当に菊池原さん鹿屋くんに会うんですか？」
聡美は亜希が鹿屋へ会いに行く準備をしてと指示した時だった。
「そうよ」
「大丈夫ですか？菊池原さん鹿屋くんが出ている作品あんまり知らないと思うんですけど」
聡美は意地悪ではなく情報不足のまま会いに行くであろう亜希を心配したのだ。
「不安が無いと言えば嘘になるけど、初対面で人と会うときに何でも知っている訳じゃないでしょ？」
亜希の答えに聡美は一つの理解をした。
彼女はアニメのキャラに会いに行くのではなく鹿屋を一人の人間として会いに行くのだと。
「公安での捜査だと対象の趣味や家族構成に抱えている個人的な問題まで知ってから接触する場合もあるけどそれは対象をコントロールする為、今回はあくまで会って社会へ危害を加えないようにしてもらう。鹿屋さんの全てを知る必要は無いわ」
亜希の考えに聡美は納得した。
「では明日の朝に車を用意します」
「お願いします。用意するのはハイヤーで」
こうして亜希は用意を整え一睡してから東京の内閣府からハイヤーで出発した。
護衛のスーツを着た警官４人が乗るアクセラの２台で東京近郊にある中乃鐘の家を目指す。

「事故渋滞です。事故は今起きたばかりのようです」
首都高を出東北道に入った時だった。
前の車がどれも止まってしまっていた。聡美が警視庁へ連絡して照会して貰うとトラックがバスに追突する事故でバスが道路を横断する形で横転した為に当分は交互通行もできないと報せた。
続く続報はバスに乗っていた観光客に多数の負傷者が出て通行の回復よりも救助が優先され通行止めは当分続くとの事だった。
脇を抜けるように消防車と救急車が走り上空はドクターヘリ以上にマスコミのヘリが飛び回って行いた。
「ヘリを呼びますか?」
聡美が言う。
亜希の顔に苛立ちが見えていたからだ。
「この現場に私を運ぶためのヘリを呼べないわ。待ちましょう」
そう言ったものの亜希は焦りと苛立ちが高まっていた。
こうしている間に事態が悪化するのではないかと。
鹿屋がギガスマキナに乗り何処かへ飛び出し世間にその存在が知られる。それだけではない、何かを破壊し治安上の責務を果たす必要に迫られた場合・・・
亜希の頭には最悪の事態が頭をよぎる。
時間は昼近くになろうとしていた。
亜希の携帯電話に槙野から電話がかかる。
「菊地原君、すまんが至急戻って来てくれ」
「え?まだ搭乗者に接触できていませんよ」
「状況が変わった。説得は中止だ」
「何故です?」
「説得よりも制圧に方針を変えると政府が決めた」
「そんな、どうしてそんな事に!?」
亜希は思わず声を荒げる。
「与党の中で自衛隊による実力行使を望む動きがあったようだ。それが政府を動かしてしまったのだ」
槙野は名前を出さなかったが須崎の事を指している。

亜希は聞きながら誰かが自分の足を引っ張っているのを知り唇が引きつる。
「どうにか時間を頂けませんか？」
亜希は槙野へすがる。
「ダメだ。君を呼び戻すように総理と国家公安委員長から言われている。指示を無視すれば統括調整官の役職を解くだけでは済まなくなる。菊地原君、残念だが戻って来てくれ・・・」
亜希の熱心さを知っているだけあって槙野も悔やみながら亜希を説得する。
亜希は携帯電話を耳に当てたまま俯き左手で頭を抱えた。
何か爆発するような雰囲気を感じ取った聡美は至近で受けるであろう爆発に身構える。
槙野は沈黙する亜希の様子を察して黙って待つ。
亜希は１０秒ほど黙ったまま俯いてから顔を上げた。
「分かりました。戻ります」
「すまない」
通話は終わった。
亜希は放心したように座席に身を預ける。
「高江さん。東京へ事務局へ戻ります」
聡美は亜希の指示を受けると外へ出て交通整理に当たる警官へ戻る為の通行の調整を始める。
運転手と二人だけになった亜希は一気に気が抜けてぼんやりと外を見る。
高速道路の景色は見えるが頭には入らない。
ただ「ここまでやって来たのに」と言う徒労感しかなかった。

第１２話統括調整官は総理官邸へ向かう

亜希を乗せたハイヤーは内閣府ではなく総理官邸へ向かった。
槙野は亜希を官邸に呼んだからだ。
「ＮＳＣ（国家安全保障会議）で決まった?そうですか…はい」
道中で亜希は槙野から政府内の動きの詳細を電話で聞いた。
ギガスマキナもとい巨大駆動体への対処を政府がＮＳＣで自衛隊による武力行使で制圧する事が決定された。
ＮＳＣは国家の安全保障に関わる重要事項または緊急事態について内閣が審議する会議である。
そこでギガスマキナへ自衛隊が攻撃する事と被造物及び被造物の協力者の身柄を確保する事が決定されたのだ。
被造物の事案について任されている自分が外されて決められた強行案
関係各位を説得して対話による解決の実現を行うのを寸前で止められただけに亜希は憤慨した。
「まったく!あのバカが!」
槙野との通話を終えると亜希は車内で吠えるように怒声を放った。
聡美と運転手は噴火した亜希の怒りに体と心が硬直する。
「すみません。取り乱しました」
二人の様子に気づいた亜希は眼鏡を直しながら気を落ち着かせる。
まだ政府への暴言を言いたかったが車内だと怒りをぶつけるべきではない二人に当たり散らす事になる。それはいけないと亜希は自分を抑える。
「高江さん。おしぼりを頂戴」
亜希の求めを聞いた聡美は自分の鞄から使い捨てのおしぼりを一つ取り出し亜希へ渡す。
聡美から受け取ったおしぼりを亜希は目元とおでこに当てて自分をクールダウンさせる。
「ありがとう。落ち着いたわ」
「それにしても政府がここまで邪魔をするとは思いませんでした

ね」
亜希から使い終わったおしぼりを受け取ると聡美は言った。彼女にしても被造物との対話が寸前で止められた事に不満を感じていた。
「与党副幹事長の須崎さんが中心になって自衛隊による攻撃を政府へ働きかけたそうよ」
「須崎さんは防衛部会長ですよね。でも部外者じゃないですか。それなのに介入するなんて」
今度は聡美がヒートアップしそうになっていた。
「こういう事は起こるのは想定していたけど、露骨に私を外して事を進めるとは思わなかったわ。本当にムカつくわね」
女子同士の愚痴の言い合いを続けながらハイヤーは永田町へと走る。
総理官邸に着くや亜希は目を吊り上げ赤いルージュ引いた唇を真一文字に結んだ不機嫌な顔を作る。
官邸の入口では槙野の秘書が亜希を案内した。
案内されたのは総理官邸地下の危機管理センターだった。
そこは二十四時間体制で有事に備えている部署だ。災害など有事の際に政府の対策室が置かれる。
「もはや実行段階か」
通された部屋は閣僚が集まる会議室だった。
総理大臣をはじめとした閣僚と統合幕僚長をはじめとした陸海空自衛隊の幹部が一同に集まり部屋にあるモニターは移動している陸上自衛隊の車列や基地でローターを回し離陸しようとしている陸自の各種ヘリの様子が映し出されている。
もはや作戦は動いていると見える光景だった。
亜希が入室すると誰もが一瞥はするが何も言われない。
「すまない。君の行動を止める事をして」
槙野は隣に座った亜希へ謝る。
「管理監のせいではありませんよ」
亜希は険しい顔を一時解いて言った。
「今はどんな状況ですか？」

「作戦開始直前だよ。自衛隊の部隊は展開が完了している。後は住民の避難完了と総理の命令だけだ」
「住民避難はどんな理由で？」
「不発弾だよ。被造物が居る自宅以外へ自治体や警察から人を出して直に避難を伝えている」
「そこまでやっているのですね」
自分の職分を無視して大きく進む事態に亜希は更に腹を立てた。
姿勢を正した亜希は机の上に資料が置いてあるのを見つけた。
そこにはギガスマキナへの攻撃に出動する自衛隊部隊と作戦内容が書かれていた。
・統合任務部隊（陸上自衛隊第１師団長指揮）
第３２普通科連隊
第１偵察隊
第１特科隊
特科教導隊第３中隊・第４中隊
第１戦車大隊
戦車教導隊第１中隊・第２中隊
第１高射特科大隊
第１施設大隊
第１後方支援連隊
東部方面後方支援隊派遣隊
第１飛行隊
東部方面ヘリコプター隊
特殊作戦群
航空自衛隊第３航空団第３飛行隊
統合任務部隊は巨大駆動体を直接攻撃する第１戦闘団（第１戦車大隊・戦車教導隊の２個中隊、第１特科隊・特科教導隊の２個中隊）と支援する陸自のヘリコプター部隊に航空自衛隊の戦闘機部隊
周囲の封鎖を行う第３２戦闘団（第３２普通科連隊・第１偵察隊）や陸自の特殊部隊に各種支援部隊で構成されている。
作戦内容は三つの段階で組まれている。

第一段階「特殊部隊による被造物及び関係者の身柄確保」
第二段階「戦車及び火砲による巨大駆動体の無力化」
第三段階「被造物の抵抗を制圧し身柄を確保」
まずは被造物と関係者が集まる中乃鐘氏の自宅へ陸自特殊作戦群が突入し身柄を確保する。
だが被造物の抵抗を受けて失敗した場合は巨大駆動体を無力化して被造物の抵抗する意思を低下させる。
抵抗する意思を低下させた被造物と関係者を制圧し身柄を確保する。
要約するとそう作戦内容は書かれていた。
「こんな風に上手く運べるかしらね」
統合幕僚監部が立てた作戦内容を見て亜希は心中でぼやく。
だが特別事態対策会議でギガスマキナへの武力行使に消極的だった佐竹統幕長を思うと作戦を立てさせられた自衛隊側も苦労があったようにも亜希は文脈で読み取った。
作戦計画は道筋だけ書かれていて作戦が成功できる要素が書かれていないからだ。
無理もない、能力が常識から外れているアニメやゲームの創作世界から来た者なのだから。「勝つ要素が見つからない」のだ。
「警察より作戦地域の住民避難完了の報告がありました」
「特作群及び支援部隊の配置完了しました。いつでも開始できます」
報告が総理のところへ上がる。総理はそれでも佐竹統幕長へ作戦が成功するか念を押すような質問をしている。
亜希はこの場に集まる面々を見渡す。
やはりと思ったが閣僚では無い須崎副幹事長の姿は無い。
居ないのは当然だが自分を外して事を進めた張本人が居ないのは腹立たしい。
「自衛隊による作戦開始を許可する」
総理が決心を表明した。
「さて、私抜きでどれだけやれるか。お手並み拝見と行きますか」
亜希はこれから始まる作戦を険しい顔で見届けると決めた。

第１３話　被造物に対する特殊作戦を実行する

「サクラ１よりシラカバ送れ」
「シラカバ受信」
「サクラの配置完了せり」
中乃鐘の自宅周辺に陸上自衛隊の特殊部隊である特殊作戦群の隊員が包囲の形で展開を完了した。
隊員が手に持つＨＫ―４１６小銃は中乃鐘の自宅に向け構えられている。
「シラカバよりサクラへ。別命あるまで待機」
「サクラ了解」
特殊作戦群は総理の作戦許可が下るまでしばし待つ事になった。
現場で指揮を執る真垣三等陸佐は暗視装置越しに対象となる中乃鐘宅を見つめる。
電気が点いている以外何も変化は無い。
だがあの家の中には人知を超えた能力を持つ人間が居るらしい。
「危険性を除去すべく身柄を確保する」
特殊作戦群の群長から聞かされた作戦内容はどこか掴みどころが無かった。
専守防衛の自衛隊にあって「危険がある」として先制攻撃のような手段に出るのは珍しいと言える。
相手の顔や名前は知らされず、「この住宅に集まる者達は特殊な人間離れした能力を持つ」としか教えられていない。
何者が居るか不気味でならない。
「見張りやセンサーは確認できません」
中乃鐘邸を偵察している隊員から報告が入る。
真垣は不思議に思う。
自分達のような特殊部隊が出動するような事をしている連中が潜んでいるにしては警戒心が低過ぎる。
ますますあの家に潜む何者かが不気味に思えた。
「戦車や野戦特科を中心にした火力部隊も展開するが我々で制圧し

事態を早期に終結させる」
群長は目的を更にこう述べた。
何者が居るか不明だが明確な侵略行動があると国民に知らせないまま自衛隊が実弾を撃つ戦闘を繰り広げられば野党やマスコミのみならず世論も紛糾する。
政権が倒れるだけではなく自衛隊の置かれる状況にも影響するだろう。
だからこそ特殊部隊により密かに事態を終わらせる必要があるのだ。
「シラカバよりサクラ1へ送れ」
「サクラ1受信」
「作戦開始」
「サクラ1了解送れ」
真垣はようやく下った作戦開始の命令を受け取る。
「サクラ1より各員へ。突入する」
真垣の指示が下ると事前の計画通りに隊員達は動く。
ＨＫ４１６を構え周囲を警戒しつつ夜の暗い空間を前進する。
真垣は作戦が展開している様子を見守る。
気配を消しながら速足で前進する。その視界は装着した暗視装置により暗い夜でありながら緑色のクリアな視界で見る事ができる。
センサーや見張りも居ない。普通の人間相手なら楽に突入して奇襲を成功させられるだろう。
だが目標が特殊な人間離れした能力を持つならこうして近づいているのを察知しているのかもしれない。
しかし迷う暇はない。
別行動の隊員により中乃鐘宅への送電を止め灯りが消された。
突然の暗闇で驚いている隙に突入する。行くしかない。
先行している隊員が放り込んだ音響閃光弾がカメラのフラッシュのような眩い光と高音を発した。
これで目標の視界と聴力を奪う。
「突入！」

隊員達は中乃鐘宅の窓や戸を蹴破り侵入する。
真垣は作戦の様子をより見る為に三脚で固定したカメラのような機材である近距離暗視装置ＪＧＶＳ―Ｖ７を使う。
無線には隊員の突入に混乱する目標らしき声も聞こえる。
「確保！目標を確保！」
誰かを拘束した通信も入る一方で「セレジア！殺してはいけない！」「分かっている！」と若い女らしい声が聞こえる。
その女の声の方向を見ると長い髪の女が剣らしき物を振り回し隊員の銃を斬りまたは刀の柄を当てて昏倒させている。
またもう一人の髪の短い背の低い女は透明な盾みたいな物で隊員の拘束を防ぎなおかつ盾を押して隊員を倒している。
「もう目標の１人を発見するも抵抗している」
別の部屋に突入した隊員が通信を送って来た。
目の前と別室の戦闘の状況はまさに苦戦している。格闘戦による拘束をしようとして銃撃を禁じているとはいえ特殊部隊の隊員がここまで手こずるとは真垣でも信じられなかった。
「至急！至急！巨大駆動体が動いた！離陸した！」
無線に割り込む緊急電はあの巨大な物体（ギガスマキナ）が動いたと伝える。
まさかアレが来るのかと真垣が新たな脅威を感じたと同時に目の前にその巨大な物体が降って来るように現れた。
「第３小隊、誘導弾用意！」
真垣は軽装甲機動車で待機していた第３小隊を呼び出す。その第３小隊は０１式軽対戦車誘導弾（軽ＭＡＴ）を持っている。
巨大駆動体対策で一応持ち込んだ軽ＭＡＴだがこれだけでは心細い。
「サクラ１よりハンター１へ支援求む。送れ」
真垣は上空待機していたＡＨ―１対戦車攻撃ヘリの小隊を呼び出す。
もはや隠密に事を収める段階では無くなった。
巨大駆動体が敵として現れた事でミサイルでも砲弾でも使うしか

ない。
しかし真垣は「撃て」とは命じられなかった。
何故なら巨大駆動体が中乃鐘宅を持ち上げその掌にあるからだ。
中に居る隊員や被造物の関係者である一般人を巻き込んで撃つ事はできない。撃つ構えを見せて威嚇するのが精いっぱいだ。
「静まりなさい！私達は抵抗しない！」
鋭い女の声が無線に入る。
どうやらこれ以上の抵抗は無いようだが真垣は気を緩めない。
この状況から変わらなければ銃もミサイルも降ろせない。
「停止を！」
同じ女の声でそう強く言うと巨大駆動体は両手で中乃鐘宅を元の位置へ戻し動きを止めた。
「サクラ1より各隊へ。射撃待て」
真垣は目標が矛を収めたと見えた。
それでも緊張に張り詰めた状況だ。真垣は自ら目標の所へ出向く事にした。
突入した隊員も緊張で頭が働かないだろう。
ならば自分が状況説明をするしない。真垣は「銃降ろせ！」と隊員に呼びかけながらセレジアやメテオラらの所へ歩いて行く。

第１４話　統括調整官は事態を変える

亜希は総理官邸危機管理センターで特殊作戦群による作戦行動を見守っていた。
隊員により中乃鐘宅へ音響閃光弾が投げ込まれ屋内が明滅してから隊員達が突入するのが自衛隊が撮影して生中継している映像が危機管理センターの大型モニターに移る。
「制圧はまだか？」
突入してから報告が来ない事に統幕長の佐竹は不審に思い通信担当の一等陸尉へ尋ねる。
「いえ、まだのようです」
その一尉も状況がよく分からず困った顔をしながら答えた。
「どうなっているんだ？」
総理も状況が気になっている事を口にすると閣僚達はざわめき始める。
そんな時だった。
「巨大駆動体が動きました！飛行しているという報告も！」
一尉が叫ぶように報告する。
これには亜希も目を丸くして静かに驚く。
巨大駆動体が動いたとなれば自衛隊は戦車や戦闘機を投入した大規模攻撃に移る。
もはや被造物の事件は隠せない。
被造物との全面戦争が始まると亜希は戦慄する。
だがこの状況を止める術を亜希は見出せない。ただ止めろと言うのは政治に関わる者として無責任だからだ。
動き出した巨大駆動体は中乃鐘邸を玩具のように持ち上げた。
「現地の部隊から作戦を次の段階へ移し巨大駆動体への攻撃許可を求めています」
防衛大臣は総理に改めて自衛隊の武力行使について許可を求める。
「仕方あるまい」
総理が自衛隊に攻撃を命じようとしている。

亜希はここで一言総理へ中止を求める発言をしようかと思う。
だが命令下達が少しでも遅れて現場の自衛隊員が死傷するような事になるかもしれない。
だから不用意な発言はできない。
何も出来ないもどかしさを噛みしめながら亜希はその場に座っているしかなかった。
「自衛隊へ新たな武力行使を」と総理が言い始めた時だった。
「巨大駆動体が止まりました」
一尉が報告を被せた。
「本当か？再度確認しろ！」
佐竹は現地へ再確認を命じる。
総理は言い掛けた自衛隊への命令を飲み込み黙って状況を見ている。　巨大駆動体もといギガスマキナは持ち上げた中乃鐘宅を元の場所へ戻すと立ったまま硬直したように止まっているのがモニターに映っている。
とはいえギガスマキナの周囲には自衛隊の攻撃ヘリコプターが滞空して警戒し、対戦車ミサイルの発射装置を構えている隊員が乗る軽装甲機動車がギガスマキナへ向けて構えている。
未だ緊迫した状況が続いているのが見て取れる。
「現地で再確認しました。巨大駆動体は停止しています」
防衛大臣が確認を総理へ伝えた。
亜希は胸をなでおろし緊張を和らげる。
そんな時に槙野の秘書が槙野へ何かメモを渡した。それを槙野が一読すると亜希へ渡した。
「被造物の一人が巨大駆動体の搭乗者へ停止を命じた模様〈防衛省担当より〉」
メモにはそう書かれていた。
これはメテオラが瑠偉へギガスマキナの動力を停止するように指示した時の事である。
亜希は被造物が抵抗する意志が無いと読み取れた。
「監理官、発言しても宜しいでしょうか？」

槙野へ亜希は尋ねる。槙野は「いいぞ。遠慮はしなくていい」と答えてくれた。
槙野の許しを得た亜希は「総理！」と言い立ち上がる。
「巨大駆動体を停止した事は被造物に抵抗の意志が無い事の現れだと思います」
亜希は打って出た。
「それは早計ではないか？」
防衛大臣が反論するが強くはない。
「被造物達は特殊部隊による襲撃を受けて囲まれているんです。逃亡でも反撃の意思があるならば今も巨大駆動体を使い自衛隊を攻撃しています」
亜希の論理に防衛大臣は早々に沈黙した。
彼は須崎に言われて自衛隊の投入を支持していただけに過ぎないからだ。
警察側は防衛省・自衛隊側の沈黙で何も言う事はできない。
「菊地原君、どうすればいいかね？」
総理が訊く。
「被造物の彼ら、彼女らと会い真相を聞き誤解を解きます」
亜希は政府と被造物の接触を一気に実現しようと試みる。
「誤解ね」と誰かが嘲笑する。他の閣僚は「会ってどうする？」「いや会って話を聞くだけでも」と言い合う。
「この際やってみては？」
政策担当の総理大臣補佐官が総理へ提案する。
この補佐官は私設秘書から総理のお気に入りとして入閣した人物だ。彼の言は総理に一番届く。
「会ってみようではないか」
総理は亜希の案を採用した。
「ですが総理、相手は超能力であるとか常識外れの存在です。総理や閣僚が会うのではなく特別事態対策会議の構成員で会うのが実務と保安の意味で良いかと」
官房長官が総理へ提言する。

内閣の女房役である彼としては政府を危機に晒す事は避けたいのだ。
「そうだな。槙野監理官、特別事態対策会議で面会をするように」
「分かりました」
被造物と総理が会う機会は無くなってしまったが亜希にとっては対策会議の場を借りて被造物と会う事ができれば目的を果たせるのだから。
「被造物達が面会を承諾しました」
現地の特殊作戦群から連絡が入ると亜希の口元だけ緩ませた。我が事成れりと言う思いになっていた。
「総理、後は我々対策会議に任せてください」
槙野が勧めると官房長官も「任せて良いでしょう」と同意する。
「では任せるよ」
総理はそう言い残すと大臣達や補佐官を引き連れて退室する。
後は亜希や佐竹など特別事態対策会議の面々だけになる。
「それでは内閣府庁舎で対策会議を召集します。2時間後に被造物の皆さんと面会を始めます。自衛隊は被造物とそれに関係する一般人をヘリで内閣府へ運んでください。客人として丁寧に」
亜希は聡美を入れてから指示を出す。
「調整官、警備も強化すべきです。隣は総理官邸だ」
警察庁の所沢が指摘する。
「抵抗の姿勢を解いたとはいえ自衛隊の襲撃を受けた被造物達の心情は穏やかではないでしょう」
「・・・・それもそうね」
亜希はそれが心配だった。
武器を持った集団に襲撃を受ければ誰でも機嫌が悪いだろう。
もしかすると面会の場で襲撃を受けた怒りを被造物達が爆発させて能力を使い攻撃を始めるかもしれない。
そうなると政府中枢がある内閣府の立地は警備を強化する必要がある。
「警視庁がすぐに投入できるのはＳＡＴとＥＲＴに機動隊の2個中

隊だ」
所沢は特殊部隊と銃器対策部隊の即応部隊であるＥＲＴに機動隊の用意ができると言った。
「治安出動の準備で空挺団と中央即応連隊はいつでも出せる。第１師団主力も２、３時間で出せるだろう」
佐竹は自衛隊の準備状況を述べた。
「増強するのはＳＡＴとＥＲＴだけにしましょう。我々の精鋭を集めても敵う相手ではありません」
亜希は最小限の警備増強に決めた。
「しかしもしもの場合」と所沢は食い下がる。
「もしもの時は総理や閣僚を立川か有明の予備施設へ避難させます。自衛隊は避難用の車輌にヘリや艦艇の準備も進めてください」
亜希は被造物が暴れた場合は東京の永田町や赤坂から総理と閣僚を避難させる考えだった。
政府は首都直下地震などで政府中枢施設の被害が大きい場合は多摩地域にある立川広域防災センターと有明にある東京湾臨海部基幹的広域防災拠点を予備施設に指定している。
亜希は万が一の場合はそのどれかに総理と閣僚を逃がすつもりだった。
「皆さん、被造物と戦うのが目的ではありません。あくまで対話をするのです。くれぐれも敵意に見えそうな態度は慎むようお願いします」
亜希はお願いしますと言ったが口調は高圧的だった。
こちらの落ち度でセレジアやメテオラなど被造物を怒らせてしまうのに亜希は神経質になりかけていた。